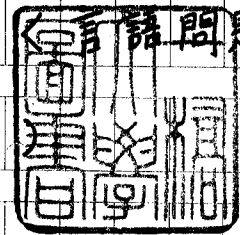


イタリアの言語問題>

く下



社会学研究科

糟谷啓介

6

橋

大

学

目次

(頁)

第四章 言語・国民・統一

1

— 19世紀の〈言語問題〉

1. マンゾーニ

— 言語の〈一体性 = 統一 (unità)〉

- (1) 小説『婚約者』が生まれるまで 13
- (2) 書簡『イタリヤ語について』(1847) 45
- (3) 『言語の統一についての報告』(1868) 95
- (4) 〈慣用 (Uso)〉の理論 149
- (5) マンゾーニと〈市場のことば〉 206

2. <言語問題>と言語学者

(1) アスヨリ — <創造的合意>と<自然的選択> 219

(2) ドヴィデイオ — あらゆる意味で調停者 333

あとがき 389

第四章 言語・国民・統一

— 19世紀の<言語問題>

イタリアの政治統一は、ピエモンテを中心
になされたが、ピエモンテは、地理的、言語
的、歴史的に、フランスとの親近性があり、
フランス語とイタリア語との二言語使用を維
持しつづけていた。16世紀に、サヴォイア公
國が成立したとき、裁判証書、公文書は、ラ

(1) De Mauro, Tullio, Storia linguistica dell' Italia unita, Bari, 1963, 1976, p. 286.

(2) ibid. p. 288.

テニ語をやめ、フランス語とイタリア語で起草することが、さだめられた。1848年のアルベルト憲法では、議会の公用語はイタリア語であるとされたが、「フランス語を用いる地方に属する議員は、随意に、フランス語を使用すること」がみとめられていた。じじつ、⁽¹⁾1860年、つまりイタリア統一直前まで、フランス語の演説が、議会でおこなわれていた。⁽²⁾そのころの議会のようすについて、つぎのよ
うな証言がある。

「ピエモンテでも、言語のちがいは、われわれの大きな難問だ。われわれの三つの国語 (tre lingue nazionali) は、フランス語、ピエモンテ語、ジェノヴァ語の順である。このうち、フランス語だけが、みなに理解される。ジェノヴァ語とピエモンテ語の演説は、議会の三分の二が理解できない。ときどきフランス語を用いるサヴォイア人をのぞいて、議員全員はイタリア語で話さなくてはならない。イタリア語で会話する習慣などまったくなかったの

(1) *ibid.* p. 287-288

で、イタリア語は、かれらにとっては死んだ言語 (*una lingua morta*) だ。だから、かれらは、心をこめて話すことができないし、まったく正確にも話せない。カヴールは、もともとすぐれた演説家なのだが、イタリア語ではそうはいかない。かれは「頭のなかのことばを」翻訳しているという事に気づくだろう⁽¹⁾。

統一勢力の中心であつたピエモンテは、その政治的正当性の顕示のため、また、ほかの地方からの自由主義亡命者をうけいれたい

(1) *ibid.* p. 287.

それまで、カヴールは、フランス語を議会で用いていた。ちなみに、カヴールの学校の成績は、フランス語がく優つて、イタリア語はく可であつた。

こともあり、議会ではイタリア語を用いるべきことを決定していた。その結果が、このようでありさまであつた。ここで言われているカヴールとは、もちろん、ピエモンテの統一政策を主導した宰相カヴールのことだ。かれ自身がある手紙で語つたように、カヴールにとって、イタリア語は「学校の言語」であり、「議会生活において、骨を折つてそこにもどらねばならなかつた」のである。⁽¹⁾

フランス語だけが十全な公的機能をもつて

(1) *ibid.* p. 32

いたわけではない。ポエモンテ語も、それに
 足るだけの十分な社会的威信をもっていた。

説教はポエモンテ語でおこなわれていたし、

ヴィットリオ・エマヌエーレ2世は、閣議に

おいてさえ、ポエモンテ語を用いたほどであ

る。

(1)

フランス語の使用については、ポエモンテ

に特有の現象という面もある。しかし、方言

のほうは、そうではない。イタリア各地の主

要な都市、ミラノ、ヴェネツィア、ナポリ、

パレルモでも事情はおなじであった。ブルジ

ョフジーンであれ、貴族であれ、日常会話は、

その土地の方言でなされていたし、公的領域

においても、方言は十全な社会的機能をもっ

ていた。また、それぞれの都市には、それぞ

れの伝統をもつ方言文学が発展していた。だ

から、これらのことばにたいして、く方言フ

という語を用いるのさえ、ためらわれるほど

なのである。それでは、くイタリア語フとは

いったい何だったのか。

(1) ローマはある意味で特殊な地位をしめる。もともと、ローマのことは、南部方言にぞくしていたが、16世紀の大量な他地方出身者の人口流入によって、しだいに東方言化していった。その結果、むしろトスカナよりも方言的性格の少ない言語がローマに生まれることとなる。

デ・マウロは、共通語としてのイタリア語を話せたのは、統一時に、総人口の2.5%にすぎなかったと推定している。この数の算出の理由というのは、こうだ。まず、イタリア語は、完全に、く文字の言語であるが、トスカナとローマでは、その言語がきわめて共通語に近いので、く文盲でない者は、イタリア語を話せたと見なす。それ以外の地方では、11才から18才までの中等教育就学者だけが、それを話せたと見なす(総人口の1000分

(1) *ibid.* p. 42-43.

の8)。この基準で、当時の統計資料を用いて出した数字が、上の2.5%という数字である。もちろん、この基準じたいがいまいなもの(1)であるし、また、基礎となる統計の数字も楽観的すぎると、デ・マウロもことわっているように、この結論は暫定的なものでしかないが、だいたいの状況は、伝えうるであろう。数字の正確さなどよりも、注目すべきはこの数字の導きだしかたである。つまり、イタリア語を話すというのは、じつは、読み書

き能力の直接の反映であるということだ。また、
 こゝで問題とされているのは、イタリア
 語を話すことができるかどうかということだ。
 あって、日常でイタリア語を話しているかど
 うかということではない。カヴールのような
 者にとってさえ、イタリア語は、生涯「学
 校の言語」でありつづけたのである。だから
 トスカナとローマ以外の地では、イタリア語
 は、ほんとうの意味では、まったく話されていなかったと見なして
 さしつかえないのである。じじっ、多くの地

(1) *ibid.* p. 34-35, p. 369-75.

方では、イタリア語を話すということじたい
 が、気どりとわざとらしさを示すものとされ
 ていた。イタリア語は、高尚な哲学的、文学
(1)
 的題材についてだけ語りうるく書物の言語で
 あった。じっさい、社会生活、日常生活に
 直接かかわるものについての語彙が、イタリ
 ア語には、はなはだしく欠乏していたのであ
 る。
 このような事態をさして、デ・ヌウロは、
 統一前後のイタリアにおいて、イタリア語を

(1) De Mauro, Tullio, Linguaggio e società nell'Italia unita d'oggi, Torino, 1978, p. 48.

話す者は、「祖國(1)における異邦人」であつた
と言つた。それはあながち修辭的な誇張でもないのである。

それでは、この状況のもとでの「言語問題」
は、いったいどのようなかたちをとるのだら
うか。

- (1) Nencioni, Giovanni, Conversione dei Promessi sposi, in Fra grammatica e retorica da Dante a Pirandello, Torino, 1983, p. 3-27.
- Corti, Maria, Uno scrittore in cerca della lingua, in Metodi e fantasmi, Milano, 1969, p. 143-160
- Monterosso, Ferruccio, Introduzione di Manzoni, Scritti linguistici, Milano, 1972, cap. I, p. 19-56
- Caretti, Lanfranco, Manzoni. ideologia e stile, Torino, 1972

1. マンゾーニ

— 言語の「一体性 = 統一 (unità)」 —

(1) 小説『婚約者』が生まれるまで(1)

マンゾーニの言語理論の出現と、それにも
とづく「言語問題」への介入のしかたが、い
かにこれまでの問題の枠組をひっくりかえし
てしまうほどのちからを持っていたかを、あ
きらかにするためには、かれじしんの小説『

婚約者』の執筆過程を無視するわけにはいか
 ない。マンゾーニの言語観の形成が、その根
 本において、自分自身の創作体験とわかちが
 たくむすびついているというだけでなく、イ
 タリア近代小説の祖といえる『婚約者』が、
 どのようにしてできあがったのかを知ること
 は、当時のイタリアの言語状況のありさまを
 象徴的にしめすことにもなるからである。
 マンゾーニは、作家生活にはいってまもな
 いころから、すでに、イタリアの言語状況の

悲勝さにたいする、痛切な意識をもっていた。
 1806年2月9日のクロード・フォリエル—
 マンゾーニと生涯にわたる親交をむすんだフ
 ランスの文学者—にあてた手紙には、こう
 書かれている。「わたしたちにとって、不幸
 なことに、イタリア国家はばらばらに分裂し
 ている。ほとんどすみずみにまでいきわたっ
 た怠惰と無知とが、話しことばと書きことば
 とのあいだに、はなはだしいへだたりをおい
 ているので、書きことばは、ほとんど死んだ

(1) Manzoni, A., Lettere, t. 1, Milano, 1970, p. 19.

ことば"であると言っているのです。このため
作家は、多数の者に語りかけようと決心して
も、その効果をつくりだせません。……うち
あけて言えば、パリの民衆が、モリエールの
喜劇を理解し、かさいをおくるのを見ると
喜ばしくもあり、うらやましくもあります。(1)
話しことばと書きことばとのへだたりとは
イタリア語の内部変異の問題ではない。イタ
リア語は、書きことば、それも、ある題材と
ジャンルとにかぎられた文学言語の様式の

別名であった。とくに、北イタリアでは、方
言とフランス語との二言語使用が支配的であ
り、マンゾーニ自身、もっとも身近なことば
は、ミラノ語であり、ついでフランス語であ
った。したがって、マンゾーニは、同時代の
カルロ・ポルタのように、ミラノ語による近
代的文学を創造するという道をとろうと思
えば、とれたはずである。しかし、当初から
マンゾーニには、一地方にかぎられないより
広い公衆へうったえかけようという意志、そ

して、それとうらはらに、イタリアの言語状況は、政治的分裂状態にぴったりと呼应しているという切実な意識があった。そして、そのとき、フランスは、作者と広範囲な国民的公衆との理想的な結びつきのある国と考えられ、したがうべきモデルとして、たえず、マンゾーニにつきまとうのである。

しかし、イタリアの言語状況にたいする、こうした一般的な認識をもっだけでなく、それが創作活動のなかにはねかえり、みずから

(1) Manzoni, A., Lettere, t. 1., p. 244-247.

脱出口をもとめねばならなくなる時がやってくる。それは、マンゾーニが、イタリアの歴史小説を執筆しようとしたときである。その苦悩のありさまは、またもやクロード・フォリエルにあてた、1821年11月3日の手紙のなかで、まざまざと語られている。

(1)

マンゾーニによれば、歴史小説とは、「現実とよく似た事実と登場人物によって、社会の一定の状態を表象すること」である。けれども、「このような主題をおつかうさい。イ

イタリア語がさまたげとして課する困難」は、
 はなはだしいものがある。なぜなら、社会で
 おこるできごとを正確に描写し、現実のなか
 へわけ入り、状況や人物の詳細な分析をおこ
 なうに足る語彙と文体を、イタリア語はもっ
 ていないからだ。このことを、マンゾーニは
 「イタリア語の貧しさ」という表現で言いた
 いのである。つねにあらゆる場面で話され、
 会話や書物であらゆることが論じられるよう
 な言語——マンゾーニはフランス語のことを

言っている——なら、そんなことはないだろ
 う。ところが、イタリア人は、「トスカナ人
 でもないなら、ほとんどけっして話したこと
 がない言語で書く」のであり、しかも、「そ
 の言語では、重大な問題が、はっきりとこ
 ばにされて、議論されない」のである。「し
 たがって、いままでイタリアでなされてきた
 もののなかには、近代的ですぐれた観念にた
 いする、さまざまな表現の包括的な型がない。
 このあわれな作家にとって、いわば、読者と

経験をわかちあうというあの感情、作者にも
 読者にもひとしく知られている道具を手にし
 ているというあの確信(感)は、まったく欠けて
 いる」とマンゾーニは言う。つまり、イタリ
 ア語は、社会的現実を把握することができな
 いだけでなく、社会的広がりをもった公衆が
 存在しない言語である。社会からの孤立感が、
 イタリア語を用いることの代償なのである。
 マンゾーニにとって、作品があっかう主題、
 題材の問題と、語りかけるべき読者の問題と

は、わかちがたく結びついているのであり、
 それを媒介するのが「社会」の観念である。
 マンゾーニの言語論においても、この「社会」
 という項が、いかに決定的な役割をはたすか
 は、のちに見ることになるだろう。
 マンゾーニは、「イタリア語」という語に
 は、「何の定まった観念もない」と言う。ク
 ルスカを支持する者と支持しない者とでは、
 「イタリア語」のすがたが、まったく変わっ
 てしまう。たしかに、クルスカは、「書き手

と読み手のあいだで、取り決められた言語の
 ある種の固定性」がひつようであることを、
 認める点では、正しいが、「言語がすべて、
 クルスカと古典作家のなかにあると信じる」
 のは、まちがっている、と言う。
 それではどうするか。そこで、マンブーニ
 は、一種の人工的折衷文体を提案する。そこ
 で目ざされているのは、言い表わすべき観念
 の秩序にあわせて、そのつど、言語表現をつ
 くりだしていくことである。イタリア語やフ

(1) く必要とくアナロジーフは、とくに、コンディヤックの哲学の基礎をなす概念である。

ランス語の読書と会話をつうじて、「よき言
 語とよばれているもの[イタリア文学語]の
 なかに、現在の必要にかなうものをすばやく
 見いだし、アナロジーフによってそれを適格に
 拡張し、そして、フランス語から、われわれ
 の言語に混ぜあわせられるものを、機敏にひ
 きだす」ことができれば、「文体のだいたいの
 完璧さ」に達しうるだろう。とマンブーニ
 は言う。それは、「現在の必要」と「アナロ
 ジーフ」という啓蒙主義的精神原理をゆいいつ

(1)

(1) Corti, M., op. cit., p. 147

の指針として、フランス語が典型的にあらわ
 しているようなくヨーロッパ的文体⁽¹⁾を、イ
 タリア語のなかに移植しようというこころみ
 であつた。

まさに、そのような文体的意図をもって、
 マンザーニは、1821年秋から、小説『フェル
 モとルチア』の執筆にとりかかるが、1823年
 秋に、その作業は中断する。ほぼそのころ書
 かれたと思われる、この小説のための第二序
 文には、そこで用いられた文体についての、

こういう自己診断がある。それは、「ロンバ
 ルディヤ語、トスカナ語、フランス語、さら
 にはラテン語までもが、それぞれ少しずつ混
 ざつた、文章の不消化な混合物」であり、そ
 して、「その文章は、これらの[言語の]枠
 のどれにも属さず、アナロジーと拡張とによ
 つて、それらのひとつひとつからぬきとられ
 た」のである。しかし、この時点で、すでに
 マンザーニは、文体のこのような折衷的解決
 法には、あきたらなくなつてきていた。こう

して、ひとつの明確な規範となるべき言語が
 さがしもとめられる。それがトスカナ語であ
 る。この序文のおわりにはこう言われている。
 「ほかのなによりもくらべようもないほど美
 しく、豊かであり、より一般的な観念を表現
 するための材料をそなえたものが、イタリア
 にはある。だれもが知っているように、それ
 がトスカナ語だ。ある時代までは、もともと
 高度な観念を表わすのに十分であったこの言
 語が、かつてヨーロッパ的認識の水準にあっ

- (1) Caretti, L., op. cit., p. 56-57 から引用
- (2) Nencioni, G., op. cit., p. 12-27.

たとすれば、いまでもまだそうである⁽¹⁾
 こうして、1824年秋から、『ミラノ語イタ
 リア語辞典』(ケルビーニ著)、『フランス
 語イタリア語辞典』、さらに『クルスカ辞書』
 などをたよりにして、トスカナ語を基礎にし
 た文体をつくるべく、小説の全面的な書きか
 えがおこなわれる。そして、それにともない
 小説の叙述様式、内部形式に決定的な変更が
 なされ、厳密なリアリズム性がそなわるとい
 える。この結果、完成したのが、1827年版の
⁽²⁾

『婚約者』である。

しかし、マンゾーニにとって、トスカナ語

は外国語同然であり、その知識は、書物から

くるものにかぎられていたため、この27年版

『婚約者』には、多くのロンバルディア語法

がのこることになる。そして、まさにそのこ

とが、評者によっては、評価されるところと

もなる。デ・サンフチスは、「方言の生き

生きしたものをつたえ、ロンバルディア語法

とトスカナ語法とが混じりあい、イタリアの

(1) Monterosso, F., Introduzione, p. 27

(2) ibid., p. 36

はしからはしまで話され、理解される言語」

が、27年版にはあると称賛した。とくに、啓

(1)

蒙古典主義の流れが強かったロンバルディア

では、27年版は、好評をもってむかえられた。

カルロ・テンカは、それを、「とくにどの都

市のものでもない、イタリア的な(italiano)小

説」と評した。このitalianoという形容辞の意

(2)

味あいについては、すでにのべたから、くり

かえさないでおくが、27年版は、トスカナ文

学語の専制に批判的で、超地域的言語をのぞ

む者たちの共感を手に入れることができたのである。

けれども、マンゾーニは、またしても、これです満足はしなかった。この点で、決定的な

転機となったのは、『婚約者』第一版が刊行

されたのと同じ年、1827年におこなわれた、

トスカナ、フィレンツェ旅行である。マンゾー

ニは、このときはじめて、生きたフィレン

ツェ語のすがたにふれ、「甘美このうえない

とまえから思っていたこの言語を、耳そのも

ので聞く喜び」を感じる。それはまさに啓示

であった。したがうべき言語の規範は、書物

から学んだことではなく、フィレンツェで

現在まさに話されている、生きた慣用である

べきだとの結論に、マンゾーニは達する。こ

うして、マンゾーニは、フィレンツェで生ま

れ育ち、フィレンツェ語を母語とする何人か

の友人たちの協力と助言をもとに、小語の一

かる。中断期間をあいだにさしはさみつつ、
 はなはだしい苦勞をかさねながら、それは
 着実にすすめられ、こうして生まれたのが、
 著者が決定版とみなした1840年版の『婚約者』
 である。最初の草稿『フェルモとルチア』の
 執筆開始から、ほぼ20年の月日が流れていた。
 マンゾーニは、こうして到達したフィレン
 ツェ主義の立場から、これ以後決してはな
 れることがなかった。けれども、マンゾーニ
 が、その出発点から、変わらずもちつづけた

のは、反クルスカの姿勢であったことは、強
 調しておく必要がある。フォリエル宛の
 手紙でクルスカ批判の部分があるのは、すで
 に見たところだし、最初の折衷文体の採用と
 いうことじたい、クルスカの權威の否定とい
 う態度をふくんでいる。そして、むしろ、年
 を経るにしたがい、フィレンツェ主義をとる
 ようになってからのほうが、クルスカへの攻
 撃は、度を強めるのである。のちに見るよう
 に、クルスカ辞書の無益さかげんは、マンゾ

(1) この点では、16世紀のベンボとマキャヴェッリとの対立を連想させるものがある。

一ニが説いてやまないものとなるのである。

フィレンツェ語の卓越性を信じる点はおなじ

であつても、復古的純粹主義を主張するクル

スカと、社会とむすびついた現在の話す慣用

に忠実であろうとしたマンゾーニとは、全面

的に衝突せざるをえないのである。

(1)

マンゾーニがめざしていたのは、古典主義

者が崇拜する言語の形式主義的範型をうちこ

わし、社会の現実の正確な把握と、表象され

る意味の透明な伝達を可能にするような近代

的散文をつくりあげることだった。初期の折

衷文体から、トスカナ-ミラノ語の時期をへ

て、最終的なフィレンツェ主義の立場にいき

つくまでの過程が、どんなに波瀾万丈のもの

であつたにせよ、近代的散文の創出という意

志は、つねに一貫していたのである。しかし

それはじつに困難きわまりない道のりであつ

た。のちに何度か、マンゾーニは、小説執筆

の過程のことを回想しているが、「生きたほ

んそうのことは (una lingua viva e vera) 」で作品

- (1) Manzoni, Alessandro, *Scritti linguistici*, a cura di F. Monterosso, Milano, 1972, p. 331-332.
マンゾーニにとって、「生きたほんとうのことば」というのは、「母語」の概念とは、かさならないことに注意。
- (2) *ibid.* p. 364.

を書こうとした、「トスカナ人でない作家」の労苦が、いかなるものであるかを強調している。とくに27年版では、「ほんとうに自分(1)のものであることばで書いたなら、精神から自発的にわきあがってきたはずの言いまわしを、「みずから創りあげねばならなかった」と、マンゾーニは語っている。(2)

けれども、異常なまでのこうした言語体験は、一作家のたんなる文体模索によるのではない。「言語問題」のなかで、伝統的にとな

- (1) Nencioni, G., *op. cit.*, p. 5-6.

えられてきた。言語と文体の二元論は、断固として拒まれる。マンゾーニにとって、文学のために、特別にとっておかれるようなことばは、存在しない。ネンチオーニが指摘するように、マンゾーニによって、言語と文学との地位関係は、逆転された。かつては、言語(1)に規範をあたえるのが、文学の役目であるとされてきたが、いまや、文学は、社会のなか根拠をもつ言語にしたがわねばならないとさめるのである。

それだけではない。マンゾーニは、既成の文学伝統にもとづかない小説によって、あらたな公衆が生まれることを望んでいた。かれの小説は、まだ確固としたものとしては存在しない、その公衆への贈りものとして書かれた。その公衆とは、統一イタリア国民である。イタリアの言語状況は、同質的国民をつくることのできない分裂した政治状況と、表裏一体のものとして考えられたことは、うえでのべた。すでに、1821年に書かれた詩では、こ

ううたわれていた。
軍隊、言語、祭壇によって
記憶、血液、心によってひとつになること
このような政治的理念は、マンゾーニにおいて、芸術的理念と合体している。そのどちらを見おとしても、マンゾーニという現象は、理解できないだろう。そして、これらのことが、かれの言語論のなかで、十全に発展し、表現をあたえられるのである。

(1) Manzoni, A., Scritti linguistici e letterari t. 1., a cura di L. Poma e A. Stella, Milano, 1974 に収録されている。

マンゾーニは、『婚約者』執筆の過程で、表現手段としての言語への熟慮をかさねることから、しだいに、言語そのものについての理論的考察をおしすすめるようになる。じじっ、それは理論とよぶにふさわしいものであって、文学者のなまはんかな直観にもとづくものではない。今日のこさめられている草稿(1)を見ると、その内容は、言語の本質についての哲学的考察、一般文法についての考察、ロックとコンディヤックへの批判をふくむ言語起源論。

(1) これらのテーマを見てわかるように、マンゾーニの言語論は、同時代の比較言語学ではなく、むしろ、18世紀フランスの啓蒙主義言語理論にもとづいていることがわかる。この出発点は、パリに滞在したときの観念学者との交友にあるのかもしれない。また、他方で、このことが、のちに言語学者アスコリとの対立をひまおこす一因として考えられる。

イタリア語の歴史的、文法的研究、チエーガリの純粹主義の検討など多岐にわたるものであり、マンゾーニの人並みならぬ探求心の旺盛さがうかがわれる。このような諸考察から(1)生まれたマンゾーニの言語理論は、体系化されてはいないものの、確固とした原理にもとづいており、さらに、そこに明確な社会的実践性がむすびついて、〈言語問題〉に一大転機をつくりだすにふさわしい独創性をそなえている。そして、マンゾーニは、これ以後の

近代文学語の出发点となる、中庸で調和的な文体を、『婚約者』で実現したが、その文体創出のかたわらに生みだされた言語理論は、いい意味でも、悪い意味でも、急進的きわまりないものであった。その言語理論が、はじめて十全に展開されるのが、『婚約者』決定版が刊行されて7年後、著作集に収録されるにあたって「イタリヤ語について」と題されることとなる。1847年2月16日の、ジヤチント・カレーナ宛の書簡である。

(2) 書簡『イタリヤ語について』(1847)

カレーナは、トリノの科学アカデミーや農業学会に籍をおいたこともある百科全書的学者であったが、言語問題についても発言が多く、とくに、1845年に刊行された、かれの『技術職業用語便覧』は、北イタリヤの産業社会を背景にした、科学用語、専門用語の統一という重大な問題にふれるものであった。又

ンゾーニのこの書簡は、この『便覧』の刊行に
 触発されたものと言っているが、カレーナ
 の著書への応対というよりも、マンゾーニの
 言語観をのべることのほうが、そこで重きを
 なしていた。だが、それが、文学者にではな
 く、科学者にあてられたこと、社会性、実践
 性の強い問題をきっかけにしてなされたこと
 は、注目してよいところであろう。

この書簡は、こののち何度もマンゾーニが
 くりかえし主張することになる。次のような

(1) Manzoni, A., *Scritti linguistici*, a cura di Monterosso, F., Milano, 1972, p. 137.

見解をのべることではじまる。「ラテン語が
 ローマにあったように、そして、フランス語
 がパリにあるように、イタリア語は、フィレ
 ンツェにある」。この見解は、マンゾーニの言
 語論のあらゆる言説を根拠づける、根本的確
 信 — それを否定する命題は考えもつかない
 という意味で — であった。論述の展開の水
 準では、このことが論理的にみちびきだされ
 る帰結であるかのような外見をとるのである
 が、現実には、理論的言説は、この確信を正

当化するために、あみだされたものであると
 も言える。これは、マンザーニの言語論の理
 論的弱さをしめすものではない。多かれ少な
 かれ、理論的言説というものは、そうした性
 格をそなえているものなのである。それはと
 もかく、このマンザーニの根本的確信で、注
 意すべきは、フランスとイタリアの平行性の
 理念が、説かれていたことだ。イタリアの言
 語的統一を、このようなかたちで主張したも
 のは、〈言語問題〉のなかで、ほとんどいな

かったのである。イタリアの言語統一の実現
 のための現実的モデルを、フランスにもとめ
 たこと、このことが、マンザーニ理論の全体
 に、影をおとしているのである。
 しかし、イタリア語がフィレンツェにある
 というのは、どういうことか。イタリア語と
 いうからには、フィレンツェ以外の場所にも
 存在するのではないか。とくに、混淆共通
 語としての〈lingua italiana〉支持者から来るよ
 うな、この予想される反論にたいして、マン

ゴーニは、伝統的におこなわれてきたように
 ファレンツェ神話を礼讃しはしない。マンゾ
 ーニがもちだすのは、言語の本質をめぐる、
 一般言語学的議論なのである。
 「イタリア全体に言語が存在し、ファレン
 ツェには、この言語の一部分だけがあると想
 定することは、言語というものが何であるか
 をまったく忘れさることであり、事物の条件
 をもっていないものに名前を適用することだ。
 その部分が欠けた言語というのは、矛盾した

(1) *ibid.* p. 139.

概念である。言語は、ひとつの全体として存
 在するか、あるいは存在しないかの、いずれ
 かである (*una lingua è un tutto, o non è.*)⁽¹⁾
 これこそ、マンゾーニ理論の核となるであ
 る。言語の「一体性」の概念に収斂してい
 く把握なのである。「一体性」とは、ある言
 語の使用の共通性をさすのではなく、言語と
 いう一般概念の内的本質をなすものとして措
 定されるのである。ひとつの全体的一体性を
 もっていないような言語は、そもそも言語で

はない。というのが、マンゾーニの考えであ
 る。それでは、マンゾーニの言うく言語フと
 は、どのようなものであるのか。マンゾーニ
 は、たんに語彙をよせあつめただけでは、言
 語にならないと言う。言語とは、「その言語
 を所有する社会が、話題として話す事物に対
 応した、ある量の語彙（総体 [complexo] と
 言っ
 たほうがいいが、量 [quantità] というより抽象
 的な用語で、いまの問題には十分だ）、社会
 があれこれ話すそれらすべてを言い表わす

(1) *ibid.*

手段」である。マンゾーニの把握が、あくま
 で、⁽¹⁾語彙中心であるのは、いなめない。けれ
 ども、マンゾーニの主張の力点は、社会
 の項にある。言語は、ひとつの社会の存立を
 前提するとともに、それを基礎づける。そし
 て、その社会に生きる人間が、言い表わすべ
 きことのすべてを包括する全体が、言語であ
 る。というのが、マンゾーニの言わんとする
 ことなのである。

このような抽象的な言いまわしをとって、い

るが、マンゾーニの目的は、トリッシーノか
 らペルティカリにいたるまでたえず支持する
 者があった。くイタリア共通語の概念を、
 否定することにあつた。各地の文学者に共通
 に理解される語彙を採用して成立するとされ
 る。この混成文化語は、く言語ではない、
 とマンゾーニは言いたいのである。
 く共通語支持者は、イタリア全体に共通
 のものが言語であり、各地方都市—フィレ
 ンツェもそのひとつ—のことばは方言にす

ぎないと言っているが、もしかれらの言う方
 言がなくなつて、く共通語だけになつてい
 たとしたら、日常生活におけるできごとや考
 えを伝達することができなくなる。言語は、
 べつべつの社会のあいだの共通の階層で成立
 するのではなく、「[おなじ社会の]さまざま
 まな階層のなかで社会的交流 (commercio sociale)
 の要求を満たす手段」であつて、方言はその
 手段たりえている。かれらの言うく共通語は
 は、「社会的道具の普遍的で継続的な観念で

(1) ibid. p. 140

はなく、なんだかわけのわからない文学的な
 はっきりとしない混乱した概念」なのである。
 (1)
 このようにマンゾーニは論じる。
 つまり、こういうことだ。社会の毎日の生
 活で、ひとびとが、いつでもどこでも、伝達
 の手段として用いているものこそ、言語の資
 格をもつ。＜共通語＞の背後には、そのよう
 な全体的社会がなく、あるのは、文学者の一
 種のカーブトだけである。だから、かれらに
 共通の語彙だけでは、言語をつくりえないの

(1) ibid. p. 142.

である。
 そうなると、＜共通語＞支持者が固執する
 ような、言語と方言との区別は、なりたたな
 くなる。じじつ、マンゾーニは、「それら[
 言語と方言]のあいだに、対立はない」と言
 い切る。なぜなら、地理的広がりが大きいか
 小さいかは、言語の本質になんろかかわりが
 ないからである。ひとびとの＜交流＞によっ
 てつくられる、ひとつの社会のなかで、十全
 な伝達機能をはたしていれば、それはりっぱ

(1) *ibid.* p. 144.

に言語たりうる。したがって、「本質におい
て、それ自体で考えるなら、-----イタリアの
諸方言と呼ばれているものは、まさしく、万
人の常識が、言語と呼んでいるものである⁽¹⁾
こうして、理論的にみれば、イタリアの各
地のことばは、みなそれぞれ平等に、言語と
しての資格を手にいれることになる。けれど
も、ここで実践的方向づけが、はいりこんで
くる。く共通文化語が否定され、そのおお
いがとりのけられたとき、目のまえには、お

(1) *ibid.* p. 144

(2) *ibid.* p. 145

そるべき言語の多様性が、すがたをあらわし
た。マンザーニにとって、そのような多様性
は、まさに、統一されるべき分裂状況としか
う映らなかつたのである。「それら[イタリ
アの諸言語]の欠点は、数が多いということ⁽¹⁾
であり、なすべきことは、「多様性を統一性
におきかえること」である。そのためには、
「これらの言語のうちの一つをえらび、あ
いにく生まれながらにその言語を身につけて
いないすべてのイタリア人に、共通の使用の

(1) *ibid.* p. 144.

ため、一致してその言語を学ばせること」が、
 どうしてもひつようになる。教ある言語のう
 ちから、ひとつを規範として採用しなければ
 ならない。マンザーニによれば、それがフィ
 レンツェ語なのである。

まさに、ここから、マンザーニのフィレン
 ツェ主義の全面的展開がはじまる。マンザー
 ニは、〈イタリア共通語〉の提唱者たちがと
 る、語彙の共通性という基準は、すてさるべ
 きだと言う。かれらは、フィレンツェに、イ

(1) *ibid.* p. 147

タリ了全体を対立させて、それが共通にもつ
 語彙が〈イタリア語 *lingua italiana*〉というもの
 をつくると言っているが、各地方のことはに
 共通する統一性など、存在しない。「ひとつ
 とが、フィレンツェに対立させたがっている
 ものは、ひとつの全体でなく、混質的なもの
 のよせあつめである。言語 (*lingua*) ではなく、
 数多くのコトバ (*molte favelle*) である。ひとつ
 の国民全体 (*nazione intera*) ではないのだ。
 マンザーニの言う〈全体〉というのは、ひ

とつ有機的同質性をもつ統合体のことであ
 る。部分をよせあつめただけでは、全体
 にならない。そこには、同質的統合性をつく
 るひとつの原理が、貫徹していなければなら
 ない。言語も、社会も、このような
全体をなしていなければ、それが存立し
 ているとは言えない。人間どうしの恒常的交
流によって、社会が形成され、言
語は、そこにおける、あらゆる場面での伝
 達を可能にする道具なのである。この意

(1) *ibid.* p. 148.

味で、方言にささえられた各都市は、そ
 れぞれ社会を形成しているのだが、イ
タリアはひとつの社会をつくりあげて
 いない。だから、そこに言語がありうべ
 くもない。それが同質的社会をつくり、ひと
 つの言語によって統合されたとき、はじめて、
国民が生まれるのである。したがって、
 いまや、同質的社会を形成する統合的原理を
 あたえてくれるような「優越したひとつの都
市、イタリアはひとつようとしている」ので

(1)

(1) ibid.

あり、それがフィレンツェである。

「その手段は、フィレンツェにすべてをあ

てがうことだ。フィレンツェ語に特有のもの

か、イタリア全体に共通のものかを問わずに

フィレンツェ語の語彙をとりあげる以外に、

なすべきことはない。」つまり、言語規範とし

て、フィレンツェ語をまるごと採用しようとする

いうのであるが、これは、言語の存立の根拠

が「一体性」であることの、理論的帰結なのである。

言語は「全体か無か」のいずれかな

のであるから、さまざまな言語から語彙を部

分的によせあつめてきたり、また、フィレン

ツェ語を規範にするといっても、特定の使用

領域にかぎられたもの——たとえば文学語——

だけを採用したりすることは、言語そのもの

の存立条件を、あやうくすることになる。

ひとつの社会でつねに話されており、日常生活

をふくめて、あらゆる領域を包括する「全体」

としての言語も、規範としてたてるべき

なのである。これは、「言語問題」において

(1) *ibid.* p. 149.

前代未聞の考えかたであった。「ひとつの言語は、ひとつの土地からとるべきだ。なぜなら、ひとつの言語は、ひとつの土地に存在するのだから。言語は、その本性として、連続的な統一体であって、[地理的に]拡張しようするのは、そうしたものであればこそである。そして、その言語をもっていない者が、それを獲得できるのは、生まれながらに、なんのなかだちもなく、その言語を身につけているひとびとがいればこそなのである。」

(1)

(1) *ibid.* p. 151.

この点でも、言わゆる < *lingua italiana* > は、言語としての資格をもたない。それは、どの特定の社会でも話されていない折衷語であって、そもそも、「みずからを豊かにするためではなく、存在するために、語彙を借りなければならぬ」というようなことは、本来の意味で

(1)

の言語にはおこりえないことなのである。

< *lingua italiana* > 支持者は、イタリア全土で書まれ理解される書物からひきだされた語彙が、共通語をかたちづくるというが、マング

- (1) ibid. p. 156.
- (2) ibid. p. 157.

一ニによれば、話しことばから独立した書き
 ことばなど、存在しえない。もしそのような
 ものがあっても、それは「死語にとどまる」⁽¹⁾
 のである。「言語とよばれる、語彙の全体を
 つくるような[社会的]関係の全体性が、作
 家と作家とのあいだには存在しないし、また
 存在しえないのだから、書くことは、十全な
 社会的交流の道具ではないし、また、そうも
 なりえない」とマンゾーニは言う。「書きこ
 とば」⁽²⁾ lingua scritta」という言いまわし自体が、

- (1) ibid. マンゾーニは、<lingua scritta>という表現を、たんなる<比喩>(tras-
lato)であるのみならず、ここで、この<比喩>への敵対の意識こそ一のものにふ
れる同意語の問題もふくめて、マンゾーニが、啓蒙主義言語論の認識論に
もとづいていることを、はっきりと示すしるしである。これは、ひとつのテーマたりうる問
題であるが、ここでは論じないことにする。
- (2) ibid. p. 158.

文字のためのなにか特別のことばがあるとい
 う、あやまった観念を流布させる「ことば」の
 正真正銘の誤用」⁽¹⁾なのである。言語は、あら
 ゆる社会的伝達のために、話されていなければ
 ならない。<話>こそ言語の本質なのであ
 る。「言語を生活のあらゆる用途にもちいる
 社会、つまり、その言語を話す社会なくして、
 どうして言語が存在しうるだろうか」⁽²⁾ (傍点引用者)
 このように、<書きことば>の概念を否定
 するまでに、言語にとって<話>が本質的で

あることを強調する言語観が、まさに当代随一の文学者の口から語られたということじたい、注目すべきことだ。これは、書きことばの次元における「共通語」を支持する「italianista」への批判であるのみならず、「死語」であることば、けっしてだれも話さない言語によってなりたってきた、イタリア文学伝統そのものへの根源的批判となるのである。

したがって、「言語」なるものは、内的同質性をそなえているのみならず、「話」によ

って、あらゆる伝達領域を包括するために、特定の社会^{全体}との同型性をたもたねばならない。

このことを、マンゾーニは、のちに、独自の「慣用 (uso)」の理論のなかで、定式化するこ

ととなるだろう。

そして、「言語統一」というものにたいする、マンゾーニのあらたな把握は、ここから生まれる理論的帰結である。つまり、社会のあらゆる人間が、あらゆる場面で用いる、日常的話しことばの次元で、言語を統一し、単

一化する。ということだ。〈話〉の次元における言語の単一化ということは、これまではほとんどだれも、考えつくことさえできなかったものなのだ。そして、じつは、このことこそ、十全たる意味での〈国語〉の概念の出現と、不可分に結びついてゐる把握なのである。

イタリアに、そのような意味での〈言語統一〉をもたらさうとするモデルが、フィレンツェ語なのである。フィレンツェ語こそ、もっと

も同質的であり、話す社会との十全な同型性をたもち、それのみが、あらゆる社会的伝達の必要を満たすに足る豊かさと広がりをもっているというのが、マンザーニの考えであった。それだからこそ、これまでも、じつは、フィレンツェ語が、イタリアの〈共通語〉とされているもののみなもとになってきたのである。「共通語と呼ばれてゐる言語のどれだけの部分が、……フィレンツェにおける共通の語彙、つまり、あらゆる階層のひとびとが、

4) *ibid.* p. 154. このへんの議論の展開のしかたは、マキアヴェッリの『叙説と対話』を思いおこさせる。

あらゆる状況で、ひとしなみに用いている語

彙にほかならないかを、「ごらんなさい」とマ

(1)

ンゾーニは言う。イタリアに真のく言語統一→

をつくりだすことができるのは、もともとか

らある共通語彙でも、作家の書きことばか**る**かきだ

された共通語彙でもない。「イタリア全体に

多かれ少なかれ共通になったフィレンツェの

語彙。これだけが、たんに統一性があるとい

うことではなく、完全な統一 (*intera unita*) へむ

けての最初の足場である。それは、「到達す

(1) *ibid.* p. 158.

(2) *ibid.* p. 153. 「本性により言語」とは、これまで述べてきたようなく言語の本質的屬性をもなえたもの、ということだ。つまり、混濁共通語としての *lingua italiana* は、真の意味でのくイタリア語たりえない。なぜなら、それはく言語ではないから。

べき] 全体のうちで、すでに獲得された部分

であり、すでに編成されている軍隊の前衛で

ある」 フィレンツェ語こそ、真の意味でのく

(1)

イタリア語 *lingua italiana* をつくる、ゆいいつ

の基礎なのである。くイタリア語とは、「

言語 (*lingua*) であり、イタリアのもの (*italiana*)

であるもの、その本性により言語であり、そ

して、共通語としてイタリア人に望まれるが

ゆえに、採用によりイタリアのもの」となる

(2)

ことばのことだ、とマンゾーニは言う。

(1) ibid. p. 159.

それでは、フィレンツェ語を話していな
 ひとびとに、フィレンツェ語を採用させる手
 だて、「われわれのなげかわしい多様性を、
 統一性におきかえる手段」はなにか。それは
 (1) フィレンツェで現在話されているままの慣用
 のみにもとづく辞書を作成し、普及させ
 ることである。社会的伝達の「真の必要」を
 提示し、語の「正確な定義」がつけられ、「
 ひとつの都市の慣用 (uso) から、つまり、ただ
 ひとつの全体をなし、現在用いられていると

(1) ibid. p. 164.

(2) マンゾーニにとって、アカデミー・フランセーズ辞書は、辞書の理想的なありかたをしめすものであった。それについて、クルスカ辞書は、その保守性、無能性が徹底的に批判されることになる。(後述)

(3) ibid. p. 165.

おりの言語 (una lingua una, intera, attuale) からと
 られた用例」で満たされれば、ちょうど、フ
 (1) ランスにおける、アカデミー・フランセーズ
 のもののよ様な、理想的な辞書ができあがる
 であろう、とマンゾーニは言う。「そのよう
 (2) な辞書は、イタリア人に、かれらのさまざま
 ことなる諸言語の真の等価物をあたえること
 により、真の必要がもとめているものに十分
 足りるだけの權威を、手に入れるであろう」
 (3) しかし、マンゾーニは、イタリアにおいて

「[ひとつの言語の]普及と支配をうながす
 ような状況が欠けていること」に気づかない
 (1)
 わけにはいかない。それと対照的なのは、フ
 ランスの場合である。たとえば、シャルル・
 ノディエは、フランス語の辞書といても、
 じっさいは、パリの辞書でしかないと言って
 嘆いたが、現実にはフランス語の中核をつくっ
 ているのは、つねにパリの慣用である。「フ
 ランスでは、このような反論は、むりやりに
 言わば、事実のちからによって、おさえつけ

(1) *ibid.* p. 170.

られて、おとろえてしまう。[ぎゃくに]わ
 れわれは、そのような助力の不足を、思慮と
 意志のちからで、おぎなわなければならない。
 ……フランスでは、事実⁽¹⁾に抗する不毛な嘆き
 であるものが、われわれのところでは、なす
 べきことへの有効な手だてである⁽¹⁾
 つまり、言語を統一するためには、イタリ
 ア語はフィレンツェにあり、イタリ語の辞
 書とはフィレンツェ語の辞書であることを、
 たえず言いつづけ、ひとつの合意にまで高め

ii) *ibid.*

なければならぬといふのである。マンゾーニにとって、「フランス語はパリにある」といふのは事実命題であつたが、「イタリア語はフィレンツェにある」といふのは、願望をもこめた権利命題であつた。たしかに、辞書をつうじての言語のおきかえといふ「人為」は、現実の「状況」のちからによつてかわることにはできないが、「そのような結果に、できるときぎり近づくための、たったひとつの手段」なのである。こうして、マンゾーニは、

(1)

イタリアの言語統一は、人為的計画性にたよらざるをえないことを、認めるにいたるのである。

以上が、カレーナ宛書簡「イタリア語について」のおおざっぱな内容である。ここには、マンゾーニの言語理論の本質が、すでに十全にあらわれており、この後の著作でも、その基本的構造は、かわることがない。その特性をいくつかあげてみよう。

1. 言語の本質的屬性としての「一体性 (unità)」。

もちろん、unità は「統一」でもあるわけだが、マンゾーニによれば、言語の統一は、さまざまにあいことなる言語をたがいに近づけあい、一点に収斂させるのではなく、すでに「一体性」をもったひとつの言語を、普及させ、地域的広がりを拡大することによってなしとげられる。のちにマンゾーニが語るところによれば、言語の「一体性」は、「言語

(1) ibid. p. 259

の生命であり、その普及の条件(1)なのである。その「一体性」とは、文法形式や語彙構成の同質性をさすとともに、恒常的交流がつくる一定の社会のなかで、あらゆる伝達を可能にするような語彙や表現を、すべてそなえていくということである。つまり、言語と社会との同型性である。注意すべきは、マンゾーニが重視するのは、日常生活で必要不可欠な事物と観念をさす語彙の充足性であるということだ。これは、文学イタリア語、そして「lin-

qua italiana>への批判を宿している。また、日常語彙は、マンゾーニ理論にとって、最大の問題のひとつとなる(後述)。

ただし、こうした議論をおこなうさいに、

マンゾーニが、<必要(bisogno)><交流(commercio)><社会的道具(instrumento sociale)>等々の、

一連の啓蒙主義的概念装置をもちいることは、

指摘しておかぬばならない。これらは、けっ

して、超歴史的概念ではなく、啓蒙主義的意

志がふかくきざみこまれた概念なのである。

(1) Croce, Benedetto, Alessandro Manzoni e la questione della lingua, in La letteratura della nuova Italia, vol. 1., Bari, 1914, 1973.

言語は、社会における交流の必要をみたす、

觀念の伝達のための道具である、という言語

觀は、フランスの百科全書派から觀念学者に

いたる、啓蒙主義言語理論の公準であった。

マンゾーニ理論のこの側面が、後年、<伝達

ではなく、<表現>を言語の本質とみなすク

ローチエから、主知主義として、批判をうけ

ることにもなる。しかし、これは、たんに言

語理論の問題⁽¹⁾ではなく、政治的な次元をもふ

くんだ問題なのである。

だが、言語にく一体性の性格を付与する
 ものはなにか。それが、言語の存立根拠とし
 てのく慣用(Usa)である。このく慣用の概
 念は、うえの書簡ではまだあらわれていない
 が、その萌芽ともいえる把握は、展開されて
 いる。その概念は、のちのマンザーニの言語
 理論では、ひとつの原理にまで高められるこ
 とになる。

2. 言語(lingua)と方言(dialetto)との対立の
 理論的廃棄。

社会というものは、ひとびとの日々の共同
 生活が形成するのであり、地理的広がりの大
 小は、その本質とはかかわりがない。マンザ
 ーニの目から見れば、くイタリアは、ひと
 つの統合的社会をなしていない。そして、各
 地方のく方言は、その土地での十全な社会
 的伝達手段となりえているのだから、本質的
 には、く言語の性格をもつ。

しかし、マンザーニにあっては、この把握
 が逆流することになる。というのは、言語と

方言との対立がないのだから、一地方のことばを、イタリア全体のことばとして採用することばが、認められるようになるからだ。

3. 言語における「話」の絶対的支配。

言語は、社会におけるあらゆる伝達に役だ

たぬばならないのだから、まず話しことばと

して、存在しなくてはならない。読み書きは

社会的伝達のすべての領域を、けっしてみた

しえないからだ。「書」が存在するのは、そ

の基礎に「話」があればこそなのである。

しかし、ここでも逆流がおこる。真の言語統一は、「話」の次元でおこなわれなくてはならない。書きことばの共通化ではなく、日常生活の話しことばそのものの画一化を、目ざさぬばならないのである。

4. ファレンツェ語の優位性。

各地方のさまざまな言語のなかで、イタリ

ア全体の共通語として採用すべきなのは、ゆ

いいつ、ファレンツェ語である。これは、マ

ンブーニの根本的確信であるから、理論的説

明は、ほとんどなされない。しいてそれをさ
 がせば、伝統的なフィレンツェ神話によりか
 かった面をのぞいて、つぎのふたつがある。
 ひとつは、フィレンツェ語がこれまでモイ
 リアの共通語彙のみなもとであつたというこ
 と。もうひとつは、フィレンツェ語が、発展
 した社会における、すべての伝達を可能にす
 るような豊かさをもっていると考えられたこ
 とである。ある意味で、フィレンツェ語は、
 もっとも進歩した言語と捉えられたのである。

ただし、マンゾーニが規範とみなすフィレ
 ンツェ語は、伝統的文学語としてではなく、
 日常生活で話される口語慣用としてのもので
 あることは、強調しなければならない。これ
 は、文学伝統からの離反であつて、のちに、
 マンゾーニが、フィレンツェ文学者からさえ
 批判をうけることになるのは、まさに、この
 点にかかっているのである。

5. 言語統一のモデルとしてのフランス。
 マンゾーニが、イタリアの言語的分裂状態

の対極にあるものと考えたのは、パリという
 中心をもつことで言語統一をなしとげたフラ
 ンスである。マンゾーニの望みは、イタリア
 にも、パリに比すべき言語的中心を確立する
 ことにあった。こうして、フランスの中央集
 権的言語体制が、イタリアの言語統一の現実
 的モデルとなって理想化され、イタリアのも
 つ多様性、複数性といった、否定すべきもの
 となる。そして、後に見るように、マンゾー
 ニは、そのような言語体制の確立にあたって

政治権力のはたす役割を、きわめて重視して
 いるのである。

6. く言語のおきかえの手段としての辞
 書。

この書簡では、まだ教育体制のことについ
 ては、ふれられていないが、イタリアの言語
 統一の最良の手段は、フィレンツェ口語慣用
 にもとづく辞書を作成することであるという

ここで述べられた

考えを、マンゾーニは終生おとてることがなか
 った。言語におけるく話の支配が、あれほ

ど強調されながら、その言語を普及させる手段が、至高のく書である辞書だと見なされたことは、マンゾーニ理論の最大の内的矛盾であり、理論的にも、もっとも弱いところであった。これは、もしかすると、『婚約者』執筆のさい、とくに27年版において、辞書が不可欠の道具であったという、マンゾーニ自身の個人的体験が、わざわざいっていたのかもしれない。

(1) Vitale, M., op. cit., p. 460-461

(3) 『言語の統一についての報告』(1868)

マンゾーニのこの書簡は、1850年に著作集の巻のひとつにおさめられて、公刊される。これにたいし、ミラノの雑誌「Crepuscolo」に拠ったカルロ・レンカからのはげしい批判があるにはあったが、⁽¹⁾一作家の私的書簡というかたちをとっていたこともあってか、それほど大きな反響をよびおこしはしなかった。当時のイタリアの状況は、リソルジメントという

(1) Romano, Sergio, Histoire de l'Italie du Risorgimento à nos jours, Paris, 1977, p. 32-39.

さまざまな政治的潮流が対抗、衝突しあう、
 はなはだしい混乱の時代であったから、言語
 の統一という一見抽象的な課題は、さしせま
 った政治的問題とはなっていなかった。けれ
 ども、統一イタリヤ王国成立の前夜から、言
 語問題は、解決すべき実践的課題となつて、
 あらわれてくる。それまでもはや、既存の言語
 状況における、文化言語の次元での規範設定
 の問題ではありえなかった。政治的統一が突
 現したにせよ、「言語のない国民」のすがた

があらわになるにつれ — ピエモンテの議会
 でさえすでに述べたようなありさまであった
 —、国民の統一のための欠くことので
 きない要因として、言語統一の問題がのしか
 かってきた。言語問題は、あらたな局面
 にはいった。それは、国民を創出する役
 目をもつ公教育体制を確立しようとするなか
 で、目のまえにたちふさがるひとつの障害と
 なった。無償義務教育制度をさだめた1859年
 のカザーティ法 — ただし、じっさいには、

この法律はほとんど効力をもっていなかった
 — においては、〈国語〉教育の重要性が、
 説かれていたが、〈国語〉としてのイタリア
語を、だれも話していなかったのである。生
 徒はもちろんのこと、教員においてさえ、イ
タリア語の正確な知識をもっている者は、ま
れであった。とくに、口頭教授法が優位を占
める初等学校は、圧倒的に方言が支配してい
た。したがって、〈国民〉のすべての者が諸
方言言語としての〈国語〉は、ゼロから、つく

(1) cf. Ruggi, Antonio Santoni, *Orientamenti culturali, strumenti didattici, insegnanti e insegnamenti*, in *Storia della scuola e storia d'Italia*, Bari, 1982, p. 11-12.

りだされねばならなかつた。⁽¹⁾ こうして、〈言
語問題〉において、〈教育〉の主題系が、き
わめて重要な位置をしめることになる。これ
 までは、言語というものへの意味づけや正当
性付与が主たる課題であつた〈言語問題〉は、
〈国民教育〉の主題とむすびつき、さらに、
明確な政治的プログラムのなかにおかれたと
き、はじめて、言語の社会的現実に、直接の
反作用をおよぼしはじめるのである。

1867年に、文部大臣に任命されたエミーリオ・ブロリオは、マンザーニの崇拜者であったが、マンザーニの言語論がさし出していた提案を、政策のなかで実現するべく、1868年1月14日の省令で、ひとつの委員会を設置した。その委員会の任務は、「よい言語とよい発音の知識を、民衆のあらゆる階層においてすみずみにまでひろめることができるようなあらゆる措置と手段を研究し、提案すること」と規定されていた。委員会は、ふたつの部会

にわけられ、ひとつは、マンザーニ、ボンギ、カルカノによるミラノ部会、もうひとつは、ランブルスキーニ、ベルトルディ、マウリ、トマセオ(即時退会)によるフィレンツェ部会であり、全体の委員長はマンザーニが、副委員長はランブルスキーニがつとめるというしくみになっていた。このときマンザーニの反応はすばやかだった。マンザーニは、委員会が設置されてから一ヶ月しかたない2月19日に、大臣ブロリオにあてて、ひとつの報告

を提出するのである。カレーナ宛書簡からもわかるように、マンゾーニは、すでに独自の言語観を確立していたし、そのなかには実践的方向づけもふくまれていたから、それをより現実的な政策へと適用するのに、さほどの日時をひっようとしなかったのだろう。この報告は、さらに、フィレンツェの雑誌「Nuova Antologia」3月号、ミラノの雑誌「Perseveranza」3月5日号にすぐさま発表され、大きな反響をよびおこし、これ以後の、マンゾーニ派と

(1) Manzoni, A., Dell'unità della lingua e dei mezzi di diffonderla, in Scritti linguistici, p. 173-209.

反マンゾーニ派がいりみだれての大論争が生まれるきっかけとなった。それが、『言語の統一とそれを普及させる手段について』と題(1)された報告である。ちなみに、このとき、マンゾーニは、83才に達しようという高齢であった。

この報告は、政府機関の公的報告という性格をおびていたことから、カレーナ宛書簡にはみられない。現実の言語政策の実行についての議論をふくむことになった。ある意味

で、カレーナ宛書簡のおわったところから、この報告は、はじまるのであり、前者がより理論的な主題をあつかっていたとすれば、後者は、そこで確立された理論にもとづく実践的問題が論じられている。だから、この報告の内容を、度相な意味での言語政策や言語計画の次元でのみうけとったとしたら、はなはだしなあやまをおかすことになる。その底には、言語にたいする認識論的まなざしが、つねに横たわっているのであり、その政治性

には、言語世界の統一的把握という知的態度が、不可分にむすびついているのである。マングーニの単一言語主義が、きびしく批判されねばならないのはもちろんであるが、それは、政治と知とが、おなじもののことなる表現となるような政治的認識論の次元でおこなわれねばならない。

だが、マングーニの報告を、きわめて実践的なものにしたのは、やはり、統治制度におけるだけでなく、全社会的次元でのく国民統

一>が、さしせまった課題となった。イタリ
 アの政治状況があったからである。この報告
 は、まさに、カレーナ宛書簡では、はっきり
 と提示されていなかった。<国民>と単一的
 言語の必要性との結びつきを、強調すること
 ではじめられる。

「さまざまなことば (idiomi) が活力をもっ
 ているが、ひとつの言語 (lingua) を共通に手にし
 ようと望む国民 (nazione) は、当然のことながら
 この [ことばの] 多様性のなかに、
 ざす意

図にたいする。第一の強力な障害を見いだす。
 抽象的にいえば、そのような障害をのりこ
 える手段がなにかは、明明白白である。それ
 は、観念の伝達のさまざまな手段を、たった
 ひとつの手段におきかえることだ。そのた
 たひとつの手段は、国民のおのおのの部分で、
 ひとつひとつのことばが果たしている本質的
 な役目をひきついで果たすことによって、お
 そらくそれほど本質的ではないかもしれない
 が、重要であることきわまりない、国民全体

(1) ibid. p. 184.

の人間がたがいに理解しあうという必要を、
 あたうるかぎり十全に統一的に満たすことが
 できるであろう。
 (1)
 <言語のおきかえ>による言語統一という
 考えかたは、すでにカシーナ宛書簡でも説か
 れていたが、ここでは、言語は觀念の伝達の
 手段であるという、あからさまに啓蒙主義的
 言語観にもとづいて、言語統一政策のひとつ
 の原理にまでたかめられている。マンゾーニ
 の啓蒙主義的言語理論への依拠は、かれの言

語学的教養が、コンディヤック、ボーゼ、観
 念学者 (ideologue) たちの著作によって、そだて
 られたことから来るものであることは、すで
 にふれた。デテュット・ド・トラシイヤカバ
 ニスを筆頭とする觀念学者たちとは、1805年
 から1807年のパリ滞在のときに、直接の親交
 をもっていたほどである。そして、フランス
 革命のさいの言語政策の認識論は、政治的ジ
 ヤコバン主義よりも、むしろジロンド派に近
 い立場をとる觀念学者系のひとびとによって

(1) この問題は、議論しているときりがいいから、いまは、これだけの指摘でとどめておく。

つくりあげられたと見なし(1)てよい(ただし、

この点では、ジャコバン対ジロンドという政

治的対立は、ほとんど意味をもたないが)。

それでは、マンゾーニは、フランス革命の言

語政策 — 「方言の撲滅」をめざす — につ

いて、はっきりとした知識をもっていたのだ

ろうか。マンゾーニの言語論のなかには、そ

れへの言及がまったく見られなから、この

点はどうとも言えない。同質的<国民>を形

成するための言語の単一化ということでは、

まったく共通の志向をもっていたのだから、

言及のないことのほうが、かえって不思議に

さえ思えるけれども、とにかく、実際の影響

関がないにせよ、社会状況がべつのものであ

ったにせよ、その共通の志向は、共通の認識

論的基盤から生まれでてきたことに、注目す

べきである。

本題にもどらう。理論的には、述べられた

ようなく言語のおきかえが、考えられるの

だが、イタリアでは、その手段自体が問題と

なる一方、どの言語を採るべきかという問題
 が、1500年代以来の「言語問題」における
 議論のまゝとなつてゐる。しかし、マンゾー
 ニは、それらの議論はまったく不毛であつた
 と見なし、言語統一のための手段は、つねに
 存在してきたのだが、そのための有利な状況
 が、イタリアではととのわなかつただけだと
 言う。その「有利な状況」とはなにか。それ
 は、中央集権的政治体制の確立なのである。
 マンゾーニは、多くのことばのうちからひ

とつがとられ、「共通語」となつた例として、
 ラテン語とフランス語とをあげる。そして、
 ローマのことばがラテン語となり、パリのこ
 とばがフランス語となつたという。先のテー
 ゼをくりかえすのだが、ここで重要なのは、
 マンゾーニが、その達成過程をはっきりとし
 めることである。つまり、「フランス語」と
 いう名まえだけだが、もともとは、ただイル
 ・ド・フランスの一地方で話されることばの
 ことを指すにすぎなかつたのだが、10世紀末

(1) ibid. p. 187.

にユーグ・カペーが王位はつき、統一王国が
 成立したときから、「言語といっしょになっ
 て、その名まえが、[王国全体に]共通のも
 のとなった」のである。だから、マンゾーニ
 は、言語統一の達成には、なんらかの集権的
 政治権力の成立がひつようであることを、み
 とめているわけであり、その見解は、この時
 期には、分権主義との対立という点からも、
 ひじょうな意味をもつ。だが、マンゾーニは
 同時に、「国民の言語」になっているものも

はじめはひとつの地方のことばにすぎないと
 いうことを、強調したのである。このこと
 を認めることは、マンゾーニ主義にとって、
 なんら弱点とはならず、むしろ、自己の立場
 を強化するものとなる。なぜなら、いま、マ
 ンゾーニは、一都市のことばであるフィレン
 ツェ語を、意識的に、イタリア全体の言語に
 しようとしているからだ。(フランス革命時
 のく國語主義者とのもっとも大きなちがいは、
 ここにある)

(1) *ibid.* p. 187

さらに、マンゾーニは、フランス語が、「
 必要の増大」と「認識の進歩」によってはぐ
 くまれて発展し、さらには、17世紀の大作家
 の手によって、国外にまで拡張し、ついには
 ヨーロッパ全体の文化言語にまでなりえたの
 も、もとはと言えば、それが「国民のなかに
 生きる多くのことば (idiomi) のさまざまにあい
 ことなる一体性 (unità) に対立するような、ひ
 とつの一体性」をもっていたからだ⁽¹⁾と考える。
 つまり、一地方のことばを拡張し、絶対的優

位性をあたえることは、精神の進歩に平
 行した言語の進歩もうながす要因である
 とさえされるのである。したがって、「フィ
 レンツェ語の受け入れと獲得が、イタリアに
 共通語をあたえうる手段であると考える者た
 ちにたいして、あびせかけられ、いまもそう
 言われつづけているような、それは地方主義
 (municipalismo) だ、という悪評」は根拠がなく
 なる。なぜなら、「ローマとパリの地方主義
 なしには、ラテン語も、フランス語も存在し

(1) *ibid.* p. 188.

なかっただろうから⁽¹⁾

こうして、ローマ帝国やフランスとは状況

がことなるとしても、「生きた統一社会にお

いては、人間どうしの諸関係の全体性と連続

性が、かならずや、言語の統一の慣用をつく

りだす」のであるから、言語統一のための本

質的条件は、リソルジメントをなしとげ、統

一国家をつくりあげたイタリアにも、おなじ

くそろっていることになる。

それだけではない。数あることばのうちか

(1) *ibid.* p. 89.

ら、どれを採るべきかは、すでに解決されて

いる。「近代イタリアには、なんらかのやり

かたで、さまざまな地方にそのことばを採用

することを強制しうる^{ような}首都が存在しなかった

とはいえ、あらわれたときから高名であった

何人かの作家のちからによって、また、より

共通の概念を適切に叙述できる^{こと} [ことば自体

の性格] によって、-----まさに、トスカナ語

が、イタリアの共通語として受けいれられ、

宣言されていた」のである。つまり、政治的

(1)

統一のまえから、トスカナ語の優位性は、保証されているというわけだ。ここでマンゾーニは、文学伝統をひきあいにだすことを、ためらわないのである。

[マンゾーニ主義にとって、1865年6月に首都がトリノからフィレンツェへ移されたことは、その主張の高揚のためには、重要なできごとであった。なぜなら、フィレンツェが「ことば」の採用を強制する首都」そのものになりえたからである。ぎゃくに、1871年7月

のローマ遷都は、マンゾーニ主義に、ひとつの難問をさしだすことになる。なぜなら、言語的中心(フィレンツェ)と政治的中心(ローマ)との分裂が、そこに生まれてしまうからである。]

けれども、マンゾーニの言語のく一体性の理論は、トスカナ語を採用すべきだという説さえ、適当でないものとしてしまう。なぜなら、トスカナのことばのなかにも多様性が存在し、ちがいがいくらささいなものであ

(1) ibid. p. 190.

ても、「一体性をかたちづくっていない」の
 であるから。規範とすべきは「ただひとつの
 言語 una lingua una」であるという原則によつて
 (1)
 フィレンツェ語、ただそれだけに限られねば
 ならないのである。さらに、マンザーニは言
 う。「ひとつの言語を普及させるために、も
 っとも有効で一般的な効果のある手段のひとつ
 つは、とくにわれわれの状況においては、辞
 書である。ここで示した原理と事実によれば、
 イタリアにふさわしい辞書は、いま生きてい

(1) ibid.

るフィレンツェのことばのものをおいてほか
 にはない⁽¹⁾
 (1)
 こうして、イタリアの言語統一のために、
 共通語として、フィレンツェ語慣用ただそれ
 のみを採用すべきであり、その普及の手段は
 辞書であるという、この報告の結論に到達す
 るのである。
 つぎに、マンザーニは、この結論にたいし
 て、ありうべき四つの反論を、みずから予想
 して、ひとつひとつしりぞけていく。それら

を概観してみよう。

反論1. 国民の言語を提示する辞書は、ひとつの都市のことばだけにもとづくべきではない。

答. ファレンツェには、イタリアにありうる、あらゆる認識と概念がある。イタリアのすべての都市には、一致した文化と生活状況つまり、一致した表現の材料がある。そこでは、「みなおなじことを言うのであり、ただ言いかたがちがうだけ」であるから、「ほか

(1) *ibid.* p. 191

(2) *ibid.*

のすべてのことばを、ひとつのことばにおきかえることができる」。反論者は、イタリアには、すでに共通語が存在しているという前提にたっているが、さまざまなことばに共通の言いかたがあるとしても、それが言語 (*lingua*) をつくるわけではない。言語は、「人間社会のなかで思考の十全な伝達」をはたさねばならず、⁽¹⁾「統一した社会において、日常でたえずまなくおこる、避けることのできないあらゆる関係から、必然的に生まれる諸記号の全体

- (1) ibid. p. 192
- (2) ibid. p. 193

性」を、獲得していなければならない。その
 (1)
 ためには、特定の社会 — フィレンツェ —
 と結びついて、すでにそうした全体性を構成
 している言語を、まるごと採用すべきである。
 この点で、書きことばにイタリア共通語を見
 いだすべきだとの意見も、うけいれることが
 できない。書きことばは、社会全体に対応し
 た「同質的全体」をつくりえず、つねに、そ
 (2)
 の一部分をふくむにすぎない。
 反論2. フィレンツェのことばは、方言に

すぎない。
 答、言語 (lingua) と方言 (dialetto) との対立が
 ありうる状況とは、ひとつのことばが、国民
 の大部分、とくに文化的階層のあいだで、共
 通にうけいれられて、そのほかのことばが、
 それぞれの地方の社会的に低い階層のあいだ
 での使用に限定されるときに生まれる。イタ
 リアでは、社会のあらゆる階層が、つねにそ
 の地方のことばを話しており、^{それが}ひとつの優越
 したことばと対立しているような状況にはな

い。その相関物が欠けているのだから、各地
 のことばを指すのに、方言という用語をつか
 うことはできない。いまは国民の言語となっている。また、フランス語も、10
 世紀末までは、かれらのいう方言であった。
 反論3. ひとつの都市が、国民全体に法を
 課することは許されない。
 答。言語は、たえずさらなる完成へむけて
 発展をやめず、新しい必要が生まれれば、つ
 めに新しい表現が作りだされていく。フィ
 レンツェ語辞書は、そのための「手段を提供

ii) ibid. p.195

するものであり、法を課するのではない」。フィ
 レンツェ語慣用をうけいれることが、言語の
 発展のみちびきとなるのである。
 反論4. 生きた慣用にもとづく辞書は、あ
 らゆる時代の作家を理解する助けにならない。
 答。作家を理解することが本質的な目的と
 なるのは、「死語」の辞書の場合だけである。
 「生きた言語」の辞書は、まったくべつの目
 的をもつ。「国民全体にひとつの慣用を普及
 させるための辞書は、できるだけ多くのひと

- (1) ibid. p. 196.
- (2) ibid.

びとに役だたなければならぬ」のだから。

(1)

「いまある慣用を、できるかぎり、そのまま

表わすこと」が目的となる。

(2)

このようなマンゾーニの議論は、すでに先
で、六つの特性のもとにまとめた言語理論を

そのまま展開したものであることは、くだく

だしく説明するひつようもないだろう。

さらに、マンゾーニは、フィレンツェ語の

辞書だけでこと足れりとするのではなく、ほ

かの地方のことばの辞書をつくることか、有

(1) ibid. p. 202.

(2) 方言辞書が、国語の普及のための手段とされることは、決して、
めづらしいことではない。たとえば、18世紀後半のフランスで、数多く出版された
方言辞書は、だいたいその目的をもっていたのである。

効な補助手段になると言う。だが、それには

条件があって、語の選択基準を明確にし、フ

イレンツェ語のく一体性と、そのことばの

く一体性とが、正確な対応をつくらなければ

ならない。そうすれば、「それら[のこと

ば]とフィレンツェ語との意外な同形性」が

(1)

明らかとなり、フィレンツェ語の習得のみち

びきとなるだろう、というのである。つまり

方言辞書は、方言からことばの自律性を奪い

さるためにつくられるのである。

(2)

この報告の末尾は、この時期にふさわしくもある。つぎのようなことは、かざらぬてい。政府、軍隊、法律の統一ののちは、言語の統一こそ、国民の統一を緊密にし、感知しうるものとし、有益なものとするのに、もっとも役だつものである。『民衆のあらゆる階層のすみずみにまで、よき言語の知識をさらに広め促すこと』という目的を公表すること、大臣閣下は、ひとまとまりの文学的問題を、社会的、国民的問題そのものにおき

(1) *ibid.* p. 204.

かえなされたのである。(1)
マンゾーニは、みづからの歴史的役割を、よく自覚していた。マンゾーニ主義が衝撃的だったのは、政治的、社会的主題を、十全なかたちで、理論的言説のなかで語ったということにあるわけではない。19世紀はじめから「言語問題」において、同質的国民を形成するためには、言語統一が不可欠の手段であるということは、直観的な言いかたが多かったとはいえ、しばしば語られてきたのである。

また、マンゾーニ主義が、16世紀以来ないが
 しろにされてきたフィレンツェ主義に、これ
 までにないほどの主張の徹底性と綿密な理論
 性をもたらしたということに、それほどの意
 味があるわけではない。マンゾーニ主義が出
 現したことの画期的な意味は、理論的貫徹性
 を内にくみながら、政治権力とむすびつ
 たかたちで、現実の言語体制の変革をめざす
 実践的プログラムを提出することができた
 という点にあった（もちろん、このプログラム

がじっさいに有効性をそなえていたかどうか
 は、べつの問題だ)。つまり、言語問題
 の内部に、政治的、社会的主題をもちこむの
 ではなく、言語問題それじたいを、政治
 化、社会化したのである。「文学的問題を社
 会的国民的問題におきかえる」というのは、
 そういう意味だ。
 そのことは、この報告に付された、マンゾ
 ーニ、ボング、カルカノ連名による委員会
 ラノ部会が提出した、フィレンツェ語辞書の作成いが

いの具体的計画案をみれば、歴然とする。もはや、文学言語のことなど一顧だにされない。社会的次元での規範言語の確立を可能にするような制度、具体的にいえば、教育制度の計画案が説かれているのである。それはつぎのようなものだ。

トスカナ生まれで、トスカナで教育をうけた教師を、各地方の初等学校へ、できるだけ数多く派遣すること。師範学校の言語講座はもっぱらトスカナ人が占めること。毎年、ト

スカナの教師が各地におもむき、会議をひらき、そこで、初等学校の古典読本の古拙表現 (arcaismi) と、現代読本の地方表現 (provincialismi) を、フィレンツェ語の慣用表現におきかえること。司法省が各県庁へおくった派遣員が、公共への通告、掲示だけでなく、新聞、雑誌に提供する報道資料を校閲すること。読み書き入門書、教理問答書、初等読本は、トスカナ人が書くか、少なくとも校閲すること。師範学校の優秀生には、賞与として、フィレン

ツエの初等学校で実習をおこなう手だてをあたえること。科学者団体に要請して、科学の分野の用語に、一定の規範をあてがうこと。

そして、新しく作成すべきフィレンツェ語辞書の普及法には、つぎのものがある。

中等学校の各学級に、生徒数にみあうだけの部数の辞書を用意すること。学校用に辞書の廉価版をつくること。初等学校と専門学校には、この辞書にもとづく日常語彙と職業語彙の辞書をそなえること。学校での賞与には

(1) ibid. p. 207.

この辞書をあたえること。

さらに、女子学校にたいしては、つぎのような、注目すべき提言がみられる。

「生きた良い言語〔フィレンツェ語慣用〕の知識が、都市にも、農村にも、ますます広がるように、あらゆる女子学校において、最初級の読みものが、推薦されるか、規定されるよう努めること。そうすれば、少しづつではあれ、その知識が、幼児たちにも知られて身近なものとなるであろう」

(1)

つまり、女性は、母となるとき、学校教育が手のおよばない就学年齢まえの幼児たちにたいして、国家の言語教育の代理執行人となることが望まれている。こうして、来たるべき世代の子どもたちは、学校に入るときには、すでに言語教育の準備期間を経てきていることになる。[<国民教育> が、女子に、<良き母> となることを要求するのは、制度としての<家庭> の受けざらをつくるだけでなく、学校以前、あるいは学校外において、

子供たちに、課すべき価値の<刻印> imprintingをさずけることが、めざされているからである。]

見ればすぐにわかるように、ここでの提言は、ほとんどすべて、<教育> の問題にかかわっている。<言語問題> が社会的次元においてたってきたのは、この<教育> の主題系が圧倒的に重要なものとなったことによる。もちろん、ここで言う<教育> とは、普遍的に自明な所与ではない。それは、端的に言えば、

国家管理の世俗公教育制度のことだ。この制
 度の概念は、けっして自明ではない。国家が
 教育の場面に参与することは、国家の側から
 見ても、かつては、まったく無意味きわまる
 ものと考えられていたのだから。とにかく、
 初等学校から大学までの階層秩序でなりたつ
 公教育という概念は、近代国民国家を背景に
 したときのみ、はじめて考えつくことができ
 るのである。けれども、マンゾーニ主義の決定
 的重要性が、言語問題を教育問題に

接合させた点にあるとするなら、その弱点—
 —さまざまの意味で—もまた、学校の
 役割をあまりに重く見すぎたということにあ
 る。このことは、つぎの3点にわけて論じる
 ことができる。

1. マンゾーニが上からの学校教育に
 よる言語のおきかえをめざしたことで、
 一方では、土着文化の根強さを、他方では、
 文化全体の形成力を無視していること。この
 点は、マンゾーニ主義にたいする、もっとも

透徹した批判者たちが論じた。

2. イタリアの学校状況は、マンザーニの
意図を実現しうるような状態にはとてもなか
ったこと。中等、高等学校においては、伝統
的純粋主義の影響が支配的であった一方、初
等学校においては、^{多くの地方で、}教員もふくめて、方言に
よって授業がおこなわれており、この状態は
ひきつづき存続した。デ・マウロはこう言っ
ている。「初等学校においては、20世紀のは
じめになってもまだ、共通語は、方言に表現

(1) De Mauro, T., Storia linguistica dell'Italia unita, Bari, 1963,
1976, p. 93

を見いだす日常生活からはかけはなれた遠い
現実であった。それは、教えられはするが、
実際のところ使われることのない言語であっ
た。⁽¹⁾
そして、これを論じているときりがないが
学校制度そのものが、脆弱きわまるものだっ
た。最大の要因としては、国家と教会、公立
学校と私立学校との制度的対立があるが、
学校ゲーム>じたい、60年代以降は沈静下し
後退さえ見られる。また、公教育政策として

(1) ibid. p. 90

も、初等学校より、中等、高等学校のほうが重視された。たしかに、1859年のカガーティ法で、義務教育が説かれていたにせよ、実行にあたる市町村レベルでは、それは完全に空文化していたし、じつはその法律じたい、学校からあまりに遠く住む生徒には通学義務がないことを認めてさえいた。デ・マウロの推定では、1870年に、就学児童人口の62%以上が、現実には義務教育を回避していた。人口の大多数を占める農民の側にも、⁽¹⁾ <読み書き

(1) Pivato, Stefano. Pane e grammatica, Milano, 1983, p. 18より
この本は、ローマ地方の初等学校の実態について分析したもので、たいへん参考になる。De Mauroの前掲書p. 95~98の資料の数字は少しちがうが、それによると、1901年で文盲率が50%以下なのは、Toscana, Lazioもふくめた北部諸州のみ、ただし、25%以下なのは、PiemonteとLombardiaだけである。

はむだなせ^いいたく^くという心性が強か。たし、
施策者側もそれを是認していた。ある資料によ
ると、イタリア総人口のうち文盲率は、18
61年に78.8%、1871年に73.7%、1881年に61.
9%であり、この低下は、北部諸州、とくに
⁽¹⁾
都市部でのものによるところが大きい。この
ような状態で、どうして学校教育による言語
統一ができるだろうか。つまり、<学校>が
十全な意味での<国家イデオロギー装置>に
は、なっていなかったのである。

3. そのことともつながるが、＜国語＞イ
 デオロキ一の比較論的観点から見て、とくに
 フランス革命のさいの言語政策とくらべると
 マンザーニ主義は、学校外の日常生活にたい
 するまなざしを欠いていること。それは、意
 識の問題ではなく、まなざしをつくりだす社
 会的形成力にかかわる。＜学校＞が十全な意
 味で機能するためには、それと平行して、学
 校外の社会生活も、＜教育＞化しなければな
 らない。

いまはこれだけの指摘でとどめ。マンザー
 ニについて言いたらないところもあるので、
 先を続けよう。

(4) ＜慣用(Us0)＞の理論

見てきたように、マンザーニは、言語規範
 をもっはらフィレンツェ口語慣用にもとめる
 ことで、言語統一の課題を解決しようとした。

けれども、意外なことに、マンザーニのフィレンツェ主義にたいする最初の批判の声は、規範の場としてまとめられたそのフィレンツェからあがったのである。1868年3月に、マンザーニの筆によるミラノ部会の報告書が、ふたつの雑誌に発表されたのち、翌4月には、フィレンツェ部会の報告書が、大臣ブロリオに提出された。そこでは、マンザーニの主張するような、フィレンツェ口語慣用に全面的にもとづく新たな辞書をつくるひつようはな

く、すでにあるクルスカ辞書を、トマセオの同義語辞典や、ファンファーニの語彙学の著作などを参考にして修正すれば、それで十分であるとされていた。しかし、問題は辞書の作成手順にあったのではない。フィレンツェ部会の報告書のほかに、いくつか発表されたマンザーニ批判を見ると、日常言語の慣用を規範に設定しようとしたマンザーニへの不満があったことがわかる。フィレンツェの文学者たちは、マンザーニが決然として切りすて

た伝統的文学語の權威を保持しようとしたのであり、多かれ少なかれ、純粹主義の空気を吸っていたかれらにとって、口語のなかのく不純な要素、とくに造語や借用語は、がまんのならないものだった。また、マンゾーニが、フランスの言語的優越性を説いたことがイタリア文学伝統を信仰する純粹主義者たちの神経をさかたにするという面もあった。けっきよくのところで、かれらは、言語にたいする文学的、審美的な価値基準によりかかった

ままであり、マンゾーニの言語理論が社会的次元で設定した問題を、ほんとうのところ、理解していなかった。

ともあれ、マンゾーニは、こうしたフィレンツェからの反対意見に答えなければならなかった。こうして、1869年に発表されたのが、先の報告の三倍ほどの長さをもつ、『言語の統一についての報告への補遺』である。

『補遺』の目的は、フィレンツェ部会の報告にたいする反批判にあった。フィレンツェ

(1) Manzoni, A., Scritti linguistici, p. 272.

部会の見かたによれば、マンゾーニが提案したのは、「文学者用の言語の全体的辞書ではなく、すべての市民の日常の使用のための、生きた言語からとられた---語の十分な集成(1)であって、その作成は、既存の辞書に削除と添加をほどこせばよいのだから、たいして難しくはない、というものであった。マンゾーニがこれに反発したのは、かれによれば、「文学者用の言語の全体的辞書」など存在しないからだ。こういうことが言えるのは、言

語がいかなるものか、全体的辞書がいかなるものかを、まったく理解していないからなのである。

たしかに、科学技術の専門用語の場合であつたなら、一般の慣用には属さないのて、専門の用語集は作りうるし、また、作らねばならない。けれども、文学には、独自の専門領域も、固有の用語法もないのだから、文学言語が、なにか独立の慣用をつくるわけでもないし、ましてや、言語全体の領域をおおうわ

(1) ibid. p. 283

(2) ibid.

けでもない。だいいち、「書きことば」(lingua
 scritta)とか話しことば」(lingua parlata)とかの概
 念」は、「われわれのあいだでひろまってい
 る。言語(lingua)についての混乱した観念の結
 果であり原因」なのである。ラテン語が支配
 (1)
 した中世であるならいざ知らず、「知識人(
 dotti)と公衆(publico)とのあいだのあの悲し
 い断絶」がなくなりつつある近代において、
 「書物は、その固有の言語を失つという不幸
 な特権を保持しうるのだろうか」。 「題材につ
 (2)

(1) ibid. p. 287.

いても、したがって、語彙についても、文学
 着用の言語と、市民の日常用の言語とのあい
 だに、もともと必然的な分離はないのだから
 このような考えかたのなかに、いまイタリア
 が必要としている辞書を作成するための規準
 はありえない(1)その規準は、まさにく慣用
 (1)
 so>のなかにもとめなくてはならない。く慣
 用>こそ、言語に全体的一体性の性格をあた
 えるみなもとである。く慣用>にもとづいた
 言語全体の辞書は、文学に関するものもふく

まな いわけではないが、それは全体をつくる
 部分としてというだけである。こうマンゾー
 ニは論ずる。
 つまり、く文学フそしてく言語フという概
 念について、フィレンツェ部会とマンゾーニ
 とに、完全なくいちがいがある。たわけだ。マ
 ンゾーニは、修辞的文学言語の崇拜から完全
 にぬけだし、社会におけるく言語フそのもの
 のありかた — そしてそこにおけるく文学フ
 の役割 — を視野のなかにおさめていた。い

かに規範的フィレンツェ主義がそこに結びつ
 いていたとしても、また、いかに辞書の役割
 が過大評価されているにしても、この点だけ
 で、く言語問題フにおけるマンゾーニの決定
 的重要性を証明するのに十分である。だが、
 マンゾーニは、フィレンツェ部会報告の一言
 半句にこだわって、く文学のための言語フと
 いう考えかたにこれほどの反発をしめしたわ
 けではない。マンゾーニに、こう言わせるだ
 けの事態が、じつはあったのであり、その象

徴が、クルスカ辞書であったのだ。だが、そこに行くまえに、**く慣用**という概念についてふれておかなければならない。

この『補遺』のひとつの特色は、マンゾーニが、**く慣用 uso** の概念を、はじめて理論的なかたちで提示したことにある。**く慣用** の概念を言語論の中心的主題にすえたのは、べつに、マンゾーニが最初というわけではない。ホラティウスやクインティリアヌスにまでさかのぼるが、たとえば、フランスで

は、めぼしいものだけあげても、16世紀のサンクティウス(『ミネルヴァ』)、17世紀のヴォージュラ(『フランス語注記』)、18世紀のボージェ(『百科全書』「慣用」の項目)などは、**く慣用 usage** を言語の存立のための本質的な要因であるとみなしていた。しかし、その多くの場合は、古典作家の慣用とか、宮廷の話しかたの慣用とかというように、規範設定の意志がはいりこんで、なんらかの限定づけがなされるのが、つねだった。マンゾーニの言う

<慣用>は、なんらの限定も受けないし、事
 後的に設定すべき規範をしめしているわけが
 もない(ただし、実践的側面が問題となると
 きには、この点はくずれるが)。この意味で
 も、マンゾーニの<慣用>概念により近いの
 は、16世紀フィレンツェ主義の把握であろう。
 それによれば、<慣用>が市民の話しことは
 のことであったことは、すでに見た。けれど
 も、マンゾーニの<慣用>は、たしかに日常
 言語そのものにその座を占めはするのだが、

それと同一視できず、そこに還元してしまう
 ことのできないなにか、である。少く先
 まわりして言うなら、言語、というよりも言
 語活動のもつ動態的で潜在的な形成力をさす
 のである。
 ともかく、マンゾーニの言うところを聞い
 てみよう。「ある語、つまり言語記号なら何
 であれ、それが一定の言語に属するか属さな
 いかを論理的に認めうるような、言語につい
 てのゆい、いつの権威、つまりゆい、いつの基準

(1) ibid. p. 305.

(2) ibid. p. 306.

が、慣用 (uso) である」。(1) マニゾーニの説明は
 こうだ。「語と觀念とのあいだには、なんら
 内的で必然的な関係はない」のだから、語が
 なんらかの意味をもつのは、「恣意的原因の
 結果」である。そして、「おのおのの語に意
 味を結びつけるのは、どのようにであれ形成
 された同意によるしかない」。(2) この社会的に形
 成された同意の全体が、〈慣用〉なのである。
 それは、言語が言語であるかぎり、根拠とせ
 ざるをえない存立原理である。だが、〈慣用〉

(1) ibid. p. 307.

が成立するのは、なんらかの過去の状態が持
 続しているからではない。あくまで、〈慣用〉
 は〈現在〉において成立する。それは、言語
 の共時的全体をつくるのである。「慣用は、
 [現在の] 事実の総体であって、事実とあり
 うべきこととの混合物でも、現在の事実と過
 去の事実との混合物でもない」。(1) とマニゾーニ
 は言う。このようなく慣用〉の把握は、ソシ
 ュールの〈共時態〉の概念とむしろ近い
 ものである。ソシュールの議論の出発点も、

記号の恣意性であった。言語が存在するのは、
 現在、話し手がある同意——いまならコードと
 言うだろう——にもとづいて伝達を行なっ
 ているからなのである。過去の状態の存続と見
 えるものも、じつは、現在の同意による認可
 を経なければならず、伝達の連続性を維持し
 つづけるためなのであって、現在の話し手が、
 過去の慣用にもとづいて話しているわけでは
 ない。まさに、ここから、「慣用」の不易性
と可易性というソシユールの主題が生まれる。

(1) *ibid.* p. 301.

「慣用は、社会における、観念のたえまのな
 い伝達に役立つならばならないので、変えうる
 ものより多くのものを、保ちつづければなら
 ない」とマンゾーニは言う。これは「慣用」
 が本質的にもつ不易性の面だ。けれども、新
 しい伝達や表現の必要がおこれば、当然なが
 ら、「慣用」は変化することもある。マンゾーニ
 は認めているのである(ただし、マンゾーニ
 の語彙中心主義からいって、もっとも注目さ
 れる変化の要素は、借用と造語なのであるか)。

(1) *ibid.* p. 307-308.

マンゾーニは、「言語の真の全体的慣用」
 を、このように定義する。「結束し共生して
 いる住民のなかで、自然的結果として存在す
 る、[社会]関係の全体によってつくられた
 記号の全体」である。〈慣用〉の二大特性
 (1)
 は、〈共時性〉と〈社会的全体性〉である。
 このような把握をすれば、過去の文学伝統に
 ささえられた文学言語を至上のものとする言
 語観はふきとんでしまうのである。
 まさに、この地点から、マンゾーニは、ク

(1) *ibid.* p. 307

(2) *ibid.* p. 296

(3) *ibid.* p. 297

ルスカ辞書の無能性を徹底的に告発する。「
 言語を見いだそうとするなら、慣用をさがす
 必要がある」のにもかかわらず、クルスカは、
 (1)
 1300年代の「純粹このうえない作家」だけに
 「權威 *autorità*」を見て、「生きた言語全体で
 はなく、-----書かれたもののなかに」採るべき
 (2)
 語彙をさがしている。クルスカのあやまりは、
 「慣用という真にゆいいつの權威と能力を認
 識しないこと」にある。これこそ、クルスカ
 (3)
 辞書には、現在ひとつような語彙が、おどろく

ほど欠乏している理由である、とマンゾーニ

は言う。

だが、ここで、マンゾーニが、クルスカ辞書と対照的に、く慣用フにもとづく辞書の理

想的すかたとして挙げるのが、アカデミー・

フランセーズ辞書なのである。マンゾーニは、

それを証明するために、フランス語とイタリ

ア語で対応する語彙をとり、クルスカ辞書と

アカデミー・フランセーズ辞書との記載項目

をならべて、いかに前者が言語の真のすかた

をとらえていないかを示そうとするのである。

クルスカを批判するために、アカデミー・フ

ランセーズをひきあいに出すとは、少々他カ

本願めいており、御門違いのところもあるよ

うに思われるのだが、実際に、マンゾーニの

あげた例を見ると、アカデミー・フランセー

ズ辞書が、語の意味の正確な定義をつけ、多

数の慣用 現の用例を掲載しているのにたい

し、クルスカ辞書は、項目そのものがはなは

だしく短いのみならず、語の説明のほとんど

(1) *ibid.* p. 272.

は、古典作品からとられた用例であって、辞書というよりは、古典の引用集とでも言ったほうがふさわしいおもむきをそなえている。いかにアカデミー・フランセーズが保守的であろうとも、このクルスカの頑迷固陋さにはとてもかなわないだろう。けれども、マンゾーニは、なぜこれほど、辞書の問題にこだわるのか。それは、「辞書の問題は、その性質上、言語問題をふくんでいる」⁽¹⁾とされたからである。

マンゾーニは、上で見たような、ふたつの辞書の方法や選択のちがいは、フランスとイタリアの言語状況のちがいが反映したものと見なしていた。そして、これまでに以上に、フランス語が「国民の言語」になるまでの過程の政治性を強調する。フランス語が、はじめは、イル・ド・フランス地方でだけ話される方言であったことを、マンゾーニは指摘していたが、いまやその拡張過程は、このようにえがかれる。

「国家 (lo Stato) がしだいに拡大するにつれ、フランス語は、首都のことばであるということによる特別な優位性と権能を手にして、そのあとにしたがった。----- 征服者たることばは、地方のことばと直面し、たえまなくたたかかった。つねにみずからの存在を感じさせ、生活のあらゆる局面に入りこみ、(欠かすことのできない条件として) 廃されようとしていたものの等価物をあたえたのである。これは、どんなにすぐれたものであっても、書物

(1) *ibid.* p. 319-20.

では獲得しえない効果である⁽¹⁾
 こうして、最初は北フランスのほかのオイル語が、つぎに南フランスのオック語がつぎつぎとフランス語に征服されていったことが示される。17世紀の大作家たちは、こうしてフランス語の慣用が、パリのことばで統一されたあとにやってきたのであって、パリの慣用が、十分に表現手段を奪ったために、作家が慣用に服従したのだとされる。このような状況では、「辞書をつくらうとする者にたい

(1) ibid. p. 297

し、慣用は、身を任せるのではなく、自らを
 課すのである」。(1) アカデミー・フランセーズ辞
 書の優秀性は、ここから生まれた、マンゾ
 ーニは言いたいのだろう。
 つまり、マンゾーニは、フランス語の統一
 性は、17世紀の古典作家がもたらしたもので
 はなく、基本的には、カペー王朝からブルボ
 ン王朝にいたる国家権力の拡張と強化の結実
 だと見なしている。これは、ある意味で、マ
 ンゾーニ理論からみれば、当然のことだ。く

学は、〈言語〉にたいして、二次的な派生
 物なのであるから、その〈文学〉によって、
 〈言語〉が統一されることは、万が一にもあ
 りえない。〈文学〉は〈言語〉にたいして不
 可逆的な従属関係にあるからだ。したがって
 真の意味での〈言語統一〉を実現するには、
 統一的なく慣用〉をつくりだすことのできる
 ような、政治的、社会的ちからの供給源がひ
 つようになる。その第一のものが〈国家〉な
 のである。この点で、マンゾーニは、フラン

(1) ibid. p. 298.

ス革命のときのく国語主義者などよりも、
 はるかに冷徹な眼をもっていたとさえ言える
 だろう。そして、マンゾーニは、このく言語
 統一の政治性を^{自覚しつつ、それを}無条件に是認しているの
 である。

これにたいして、イタリアの場合、トスカ
 ナ語は、「イタリアのほかの都市に権威を行
 使するなんらかの手段を欠いていた」ため、
 辞書の作成者がしたがるべき統一した慣用が⁽¹⁾
 規範として存在しなかった。生きた慣用にも

(1) ibid. p. 298.

とブニうとすると、トリッシーノやペルティ
 カリらのくitalianistの抗議の声があがる。「
 トスカナ語にあたえられた特権の理由は、文
 学的なものにすぎなかったので、その活動は、
 ほとんどもっぱら、文学の領域だけにとどま
 っていた」。そして、く文学だけでは、けっ
 して、く慣用⁽¹⁾をつくりあげることにはできな
 い。だから、イタリアにおいては、言語にく
 一体性を付与するく慣用⁽¹⁾という概念が、
 理解されなかったのではない。そもそも、統

(1) ibid. p. 308.

一的なく慣用そのものが、存在しなかつた
 のである。イタリアのように「さまざまなか
 とばを話す住民に分裂した国民においては、
 自然的な効力や自発的な産出によつては、ひ
 とつの慣用が存在しえないし、形成されもし
 ない」のである。

(1)

しかし、このような状況にあつても、ひと
 つの地方で自然に形成された言語 — フィレ
 ンツェ語 — が、補助的手段によつて、普及
 し、他の住民によつて獲得されることは、可

能である。その手段とは、その言語の生きた
 慣用にもとづく辞書だ、とマンザーニは言う。
 ここでマンザーニは、『報告』で述べたこと
 をくりかえしているのだが、それでは、文
学では不可能なく言語統一を、なぜ辞
書なら行なうことができるのか。なぜなら
 生きた慣用にもとづく辞書は、「共同生活に
 おいて、なんらかの言語が獲得されていく分
 析的過程を模倣している」からであり、「言
 語の生きた十全な行使を模倣するのにできる

(1) *ibid.* p. 309.

かぎり近づく手段」であるからだ、とマンゾー
 一ニは言う。これは、マンゾー一ニが、辞書に
 よるく言語のおきかえフがなぜ可能なのかを
 理論的に説明したゆい、いつの箇所である。こ
 れほどまでに、マンゾー一ニが、辞書を信頼し
 た理由は、はっきりとはわからない。『婚約
 者』の執筆過程という個人的な経験にそれを
 もとめるしかないだろう。まさに、マンゾー
 一ニ自身が、辞書をつうじたく言語のおきかえフ
 の体験者だったのである。しかし、それが辞

書であったにせよ、そうでなかったにせよ、
 人為的手段が、言語習得の自然過程を模倣す
 ることができること自体、おどろく
 べきことだ。一次的習得と二次的習得との本
 質的なちがいに気がついていないことだけで
 なく、現実の具体的事象を分析して得られた
 抽象像が、その事象の自然的成立過程を表象
 しているとする啓蒙主義的認識論にもとづい
 ていることも、マンゾー一ニの手ひどい誤解の
 一因となっているように思われる。

それはさておき、マンゾーニによれば、18世紀から急激にフランス語法が氾濫した真の原因は、イタリアに統一的な慣用が形成されなかったことにあるという。フランス語が、
く話でもく書でも同質的な慣用をもって
いたうえに、新しい学問や知識の道具とな
っていったとき、イタリアでは、ばらばらの数
多くの慣用が競合する状態にあった。ちよう
ど、シャルル八世が統一軍をもたないイタリ

(1) *ibid.* p. 325.

アにやすやすと侵攻できたように、「言語に
おいても同様に、広範な統一の欠如が、フラ
ンス語法の侵略と呼ばれるものに、道を開い
た」のである。

(1)

こう述べたからといって、マンゾーニが、
フランス語法にたいして排外主義的態度をし
めすわけではない。そのような態度は、純粹
主義のクルスカの専売特許であった~~だから~~。
しかし、そうかといって、マンゾーニは、あ
のくカフェ派のように、積極的なフランス

(1) *ibid.* p. 317(2) *ibid.* p. 318

語からの借用を認めるわけでもない。ここで

マンゾーニは、「慣用」理論に忠実に、「す

でに形成された同意」にしたがうという立場

(1)

をとる。ある語を受け入れるか、排するかは、

その語の由来によって判断すべきではない。

すでにトスカナ語の慣用に完全に入ったもの

また、これからでも慣用が要求するものを、

拒む理由はまったくない、とマンゾーニは言

う。ただし、「新たな悲しむべき雑多性」を

(2)

生みだし、慣用の同質性をそこなうような、

外来語の乱用を、マンゾーニは非難してやま

ない。借用にたいしては、マンゾーニは、「く

慣用」の概念をもとに、中庸な態度をとった

と言ってよいだろう。

じじっ、外来語を追いだせば、イタリア語

の統一性が回復できると考えるほど、マンゾ

ーニは、楽道家ではなかった。統一性の欠如

は、イタリア語の内的な本質から生まれてい

た。マンゾーニが、緊急に対処しなくてはな

らないと考えたのは、「共通の事物を意味す

(1) ibid. p. 336.

(2) ibid. p. 335.

るための共通の名前がイタリアに欠けている
 こと」であった。これこそ、分裂状態におち
 (1)
 いったイタリアの最悪の徴候であると、マン
 ゴーニは考えた。「教師たちが、もっとも身
 近な事物を、土地ことば風でなく、文書に書
 きうるような語で名づけようとしても、子ど
 もたちにそれを教えるすべがない」ほどなの
 (2)
 である。これについて、マンゴーニは、ある
 フランス人の友人からもらった手紙をひきあ
 いに出す。その内容はこういうものであった。

(1) ibid. p. 337

く出口をさすことばが、ミラノでは uscita .
 ポストイアでは egresso . フィレンツェでは sor-
 (トスカ地方の都市)
 tita . となっているが、このことは、けっし
 てことばの豊かさをしめすものではない。「
 なぜなら、同一のものを言うのに、三つの語
 があるとすると、いちどに語はひとつしか使
 えないのだから、ほかのふたつは少なくとも
 無用だ」というのである。マンゴーニは、こ
 (1)
 の意見にま、たく同意してこう言う。「これ
 こそ、イタリア全体で言われている事物にま

ibid.

まったく対応していないのみならず、言うこと
 のほんの一部にさえ、さまざまな言いかたが
 あるような語彙のよせあつめを、共通語、国
 語、イタリア語としてもっていることから生
 まれるものなのだ⁽¹⁾

このように、身近な日常語彙にまで共通性
 が存在しないことは、マンゾーニがいくどか
 強調したところである。たとえば、『報告』
 と同じく、1868年に発表された『辞書』につい
 ての手紙⁽²⁾のなかでは、トスカナ一地方の内

(1) ibid. p. 256-257.

部にさえ、はなはだしい語彙の多様性がある
 ことを指摘している。たとえば、くブドウの
 ふさぶは、フィレンツェでは grappolo、ピスト
 イアでは ciocca、シエナでは zocca、ピサでは
 pigna と言われる。また、く上着のたれぶは、
 フィレンツェでは falde、シエナでは dande、ピ
 ストイアでは lacci、アレツツォでは caide、ル
 ッカでは cigne と言われる、というように。ま
 さに、これらは、イタリアに統一的慣用が存
 在していないまたもない証拠とされるのだ。

マンザーニが、特殊な例を見つけて、事態を誇張しているというわけではない。デ・マウロは言っている。「植物から工芸、家庭生活にいたるまでの経験の全領域が、19世紀なかばには、イタリア語の言語的可能性のもとに落ちこぼれていた。こうしたときには、全イタリア的な名称がまったく欠けていたため、イタリア語では、それらについての迂言法か、そのものじたいを指すのではない類的使用語でしか言及しえなかった。じっさい、何世紀に

(1) De Mauro, T., op. cit., p. 30

もわたって、これらの領域にふれるときには、イタリア語ではなく、イタリア半島のさまざまな方言のひとつを話したのである。⁽¹⁾つまり、伝統的イタリア語は、その言説領域のなかに、まったく日常生活をふくまない言語となっていた。そのような言語状況において、マンザーニは、社会におけるひとびとの日々のかかわりあいのなかで伝達の道具となることこそ、言語の本質的機能だと考えた。〈言語問題〉において、日常言語の領域にか

んする問題が、最前面にうかびあがってきた
 のは、ほとんどこのときがはじめてであった。
 それほどまでに、知識人の言語意識は、審美
 的文学語、よくても、共通文化語の言説領域
 にしばりつけられていたのである。

しかし、そのとき、マンゾーニの目のまえ
 には、なんらの統一もない多様なすがたのこ
 とばの群れがあらわれた。そこで、マンゾー
 ニのとった方針が、フィレンツェ口語慣用だ
 けによるくおきかえフをつうじた言語統一で

あった。一見すると、まったく強引としか思
 えないうが、政治状況にただやみくもにせかさ
 れていたというわけではない。かれの言語観
 そのもののなかに、く多様なものフを排除し
 ようとする意志がひそんでいるのである。方
 言のく多様性フにたいして、国語のく単一性フ
 の支配をもとめる意志を、まずそこに見いだ
 さなければならぬのは、もちろんである。
 しかし、それはたんに言語政策、言語計画の
 問題にかぎられるわけではない。言語の単一

化の意志は、マンゾーニがもつづいた啓蒙主義的言語観を、政策の次元で適用し実行しようとしたときに生じたものではない。く多様なものへの排除の意志は、行政や立法であるときに定められ、あるときに廃止されるような政策方針ではない。それは、世界を諸価値の綱目で統禦することをめざす政治的認識論から生まれてくる。一片の法令、行政施策のなかにく認識論的なものを、抽象的言語理論のなかにく政治的なものを見いださねば

ならない。
 そのためにも、べつの照明をあててみよう。
 ここで指摘したいのは、一見ささいなことに見える。マンゾーニの同意語にたいする態度なのである。しかし、なぜ同意語なのか。
 啓蒙主義的言語観によれば、言語は思考の透明な表象となり、社会的交流 (commerce) のために、その思考を円滑に伝達することを本質的機能とする。そのためには、^{少なくとも言表において、}語はそれが指す概念と一対一の対応関係をなさねばなら

(1) *ibid.* p. 159.

ない。そうでなければ、過剰な表象、あいまいな両義性が生まれてしまうからだ。したがって、同一の客体をさす多くの語があることは、言語の本質的な合理性、経済性に反することになる。だからこそ、すでにカレーナ宛書簡で語られたように、マンザーニは、カレーナの辞書に、フィレンツェ語の *panna* (生クリーム) のほかに、おなじ意味をもつ語が四つも記載されているのを見て、それを「なげくべきわれわれの多様性」と感じるのである。
(傍点引用者) (1)

(1) *ibid.* p. 161.

(2) *ibid.*

「そのような多様性は、あらゆる階層のひとびとのあいだでたえまなく話されることばと両立しえない」⁽¹⁾。したがって、辞書は、「そのなかから選択しなくてはならないいくつかの語ではなく、採るべきひとつの語」⁽²⁾だけを記載して、社会に規範をさずけなくてはならないのである。
たしかに、ここで、マンザーニは、言語の地理的変異性ととともに、社会階層に対応してつくられる言語の階層性を拒否しているのだ

(1) *ibid.* p. 160.

が、それだけではない。ひとつの言語のなか
 で、複数の語がおなじ意味をもつという、同
 意語の存在さえ、「言語のほとんどがた
 い不都合」と見なされるのだ。もちろん、マ
 ンゾーニは、語の地理的変異性と、ひとつの
 言語における同意語とを同一視しているわけ
 ではない。前者の場合とことなり、辞書は、
 ひとつの慣用のなかにある同意語を記載すべ
 きことを、マンゾーニはみとめている。また、
 他方で、同質的社会のなかでひとつの言語が

共有されるとき、共通の理解の必要性から、
 同意語の数は、少ないものにとどめられるは
 ずだと言う。しかし、そうであるにせよ、問
 題なのは、同意語という、ある意味では言語
 の自然な現象を「さけがたい不都合」と感じ
 る言語感性である。

ここでひとつの類似現象を指摘したい。フ
 ランス革命ジャコバン独裁が最高潮に達した
 1794年6月4日、グレゴワールは「方言を撲
 滅し、フランス語の慣用を万人のものにする

必要性とその手段について」という報告を、
 国民公会でおこなった。グレゴワールは、認
 識の進歩と知識の拡大は、必然的に新しい語
 を要求するという立場から、語彙は精神の秩
 序にしたがって、たえまなく増化（増）すべきだ
 と述べる。しかし、そこに同意語は席をあた
 えられない。グレゴワールはこう言う。
 「ことばが豊かであるということは、同意
 語をもつことではない。同意語がわいわいの
 言語のなかにあるとしても、君主制と罪、共

(1) Oeuvres de l'Abbé Grégoire, Paris, 1977, vol. 2, p. 251-252.

ちなみに、チエザロッティは、「アラビア人が馬をさすのに200の語をもっていると言わ
 ている」にしても、それはかれらにとっては、文化的に必要な区別があったからで、またくの
 むだなことではないのだ、ときわめて賢明な解説をしている。(Cesarotti, op. cit.,
 p. 69) とここで、このアラビア人うんぬんというのは、一種のきまり文句になっていたの
 だろうか。もしかすると、なにか契機があったのかもわからない(たとえば、コンテ'sチック
 あたりに)。

和制と徳[の対]ぐらいなものだろう。アラ
 ビア人が、一匹の蛇や馬を言い表わすのに三
 百もの語をもっているのが、いったい何にな
 るだろう。
(1)
 グレゴワールもまた、同意語という現象の
 なかに、〈単一性〉が支配する言語モデルに
 ふさわしくないものを見いだしたのである。
〈多様なもの〉とは、分類しえないもの、
 秩序づけられないもの、条理のわくぐみにお
 さめようとしても、たえずそこからするりと

ぬけだしてしまふもののことだ。マンゾーニもグレゴワールも、同意語の現象のなかに、そのく多様なものフを見いだした(じっさいに同意語がそのようなものであるかどうかは別の問題だ)。同意語の問題など、かれらが意図した言語の単一化政策にくらべれば、ちっぽけなものだと考えてはならない。まさに、そうした意図をもつからこそ、かれらは、同意語という現象をわざわざく対象フとして選びとり — だまっ てすませ てよさ そうなもの

なのに — 、それを告発する という所作を演じたのである。だから、かれらが同意語について語った言説は、そのまま政治的なものである。

マンゾーニは、グレゴワールのように、口をきわめて方言を侮蔑するわけではない。イタリアのすべてのことは、ひとしくく言語なのである。しかし、それにもかかわらず、けっきよくは、フィレンツェ語によるく言語のおきかえフをつうじて、言語の単一化の道

にはしってしまふのは、かれが、く多様なもの
 のフにたいして、ぬきがたい敵対感をもって
 いたからにほかならない。

(5) マンザーニとく市場のことばフ

マンザーニの言語理語の支柱になっていた
 のは、く一体性>とく慣用>のふたつの概念
 である。これにもとづき、マンザーニは、言

語統一の手段としての辞書は、もっほらフィ
 レンツエ語だけにもとづくべきだと考えた。
 イタリア全体のことばのみならず、トスカナ
 地方のことばだけでも、はなはだしい多様性
 があり、それらを規範対象とすることは、言
 語が同質的く慣用>のつくるく一体性>の原
 理にささえられていゝという本質をそこなう
 ものだとされた。しかし、フィレンツエの言
 語は、完全なく一体性>をそなえていゝのだ
 ろうか。「さまざまな環境のあいだで、つま

(1). ibid. p. 260

り、都市のさまざまな区域のことばのあいだ
 で、フィレンツェにはなにがしかの多様性が
 ありはしないだろうか。いったい、メルカー
 ト・ヴェッキオのことばやカマルドーリ街の
 ことば[市場のことば]を聞いたことがない
 のか⁽¹⁾

マンゾーニは、こうした問いかけに、どう
 しても答えざるをえない。フィレンツェ語に
 く多様性をみとめることは、かれの言語理
 論、言語政策の全体に破産通告を課すことに

なるからだ。けっきょく、マンゾーニは、く
 一体性の条件に、ただし書きをつけること
 になる。こう言うのである。

「言語の一体性」ということで、たしかに、
 完全な一体性と解することはできない。言
 えば、この点で、慣用(Usò)とは、ひと
 びと全員によってひとしく所有された言いか
 たの総体ということではないし、そうもあ
 りえない。一体性ということも、それが可能な
 ところから理解するべきだ。そこにおいて、

(1) ibid.

変異性 (varietà) は最小限のものであつて、それよりもくらべようもないくらい多くの場合に、同一性 (identità) を保たねばならない要因が、優越しているのである。これを、まさしく積用、真の積用 (il vero Uso) であるといつつまり、く一体性> は、同一性をおびやかすえない程度の変異性をふくむことになる。

<lingua italiana> にたいしては、く一体性> の原理を貫徹させたたかっただマンゾーニが、フィレンツェ語にたいしては、てもなく変異性

を認めてしまふのだ。

そして、く一体性> についてある譲歩がなされると同時に、く積用> にたいしても、ある限定がつけられるのである。マンゾーニはこう言う。いわゆるく市場のことば> という言いかたは、たとえでしかなく、それがひとつの言語をつくるわけではない。それは、「フィレンツェ共通の話しことば」 il parlare comune di Firenze」の特殊用法であり、ただそのちがいはなはだしいので、カマルドーリ街の商

11) *ibid.* p. 261

人や住民は、ほかのフィレンツェ市民とも、
 さるにかねらのあいだでさえ話が通じないの
 だ。「かれらを話す人間 (*uomini parlanti*) にして
 いるのは、フィレンツェのフィレンツェ語。
 あの神聖な慣用 (*quel sacrosanto Uso*) であり、か
 れらの変種 (*varietà*) はそこにあとからはまり
 こむのである」⁽¹⁾。たぬしに、かれらに尋ねてみ
 ればよい。じぶんのことばをよいものと思っ
 ているのか、学校で教えるべきほどのものと思
 っているのかどうかを。かれらは、自分た

11) *ibid.* p. 261

ちをからかっているとしたか考えないだろ。
 「かれらは暗にみとめているのだ。フィレン
 ツェには、よいことば (*una bona lingua*) がある
 のだが、そのよいことばは、自分たちのもの
 ではないということ⁽¹⁾を
 言語とは、「社会全体の用途に適合した語
 彙の総量」ではなかつたか。慣用とは、「社
 会関係の全体によってつくられた記号の総体」
 ではなかつたか。たしかにそうだ。しかし、
 それ、その言語が、指示対象、言説領域と

して社会全体を包含するということであって、その言語を話す資格をもった言表の主体が、社会のあらゆる階層に属しうるということではないのである。けっきょく、「言語」は、「よい」という形容辞を付すことのできるよ
うな、「選別」の原理をふくむなにものかに変質してしまふ。マンゾーニが規範として考えた
フィレンツェ口語慣用とは、モンテロッソが指摘するように、「民衆全体が用いているものではなく、正しい話手 (ben parlanti) と教養人

(1) Monterosso, F., Introduzione, in *ibid.*, p. 80.

(persone colte) が採用した言語」なのであり、それによつて、文学伝統とのある種の妥協も可能となるのである。

マンゾーニによれば、「市場のことば」は、フィレンツェ語の「神聖な慣用」があつてこそはじめて存在しうるものであり、そのなかに変種として回収されるのである。「変異性」とは、「多様なもの」が馴化され、分類されたあげく、「同一性」を危険にさらさない程度に許容された逸脱である。「変異性」それ

じたいが、く同一性>を前提としてしか存在
 しえないのである。フィレンツェの「神聖な
 慣用」は、けっして、カマルドーリ街の民衆
 が話すわけではない。しかし、「神聖な慣用」
 の同一性は、その変異性そのものによって、
 保証されている。なぜなら、「かれるも自分
 のことばをよいものと思っていない」のだけ
 ら。けっさく、マンゾーニは、く市場のこ
 とば>の無秩序で喧騒にみちたく多様なもの
 の世界に、背を向けたままであった。

11) Renzi, Lorenzo, *Fiorentino e italiano: storia dei pronomi personali soggetto*, in *Italia linguistica: idee, storia, strutture*, Bologna, 1983, p. 223-239. 引用は、p. 236. p. 237から。

(言語学者レンツィは、マンゾーニの作品
 における代名詞用法を分析した結果、こう言
 っている。「マンゾーニは、フィレンツェの
 民衆の慣用にもどろうという意図を、もって
 いなかった」、
 「マンゾーニの作品が決然と
 しているのは、ただ、生きた民衆フィレンツ
 ェ語を排除しているということだけである」
 と。)

ii)

(註) マンゾーニの『俗語論』解叙について一言ふれておく。

マンゾーニは、*<volgare illustre>* を、悲劇、カンツォーネで用いらるる文体の様式としてしか把握せず、それが言語そのものをさすとは考えない。マンゾーニによれば、『俗語論』は、修辞学に於ける著作となる。

もちろん、この把握は、*<volgare illustre>* の概念をたてはいて、*<lingua italiana>* として読む立場への対立から生じたものだ。